

捕虜問題をめぐる 日英「和解」の断層(上)

— 元捕虜たちはどう語っているか

中尾知代

エピグラフ

わしにはどうしても理解できん——なぜ、(日本軍は)あんな酷い事を同胞たる人間にできたのか……。あれはわしの身体に入ってしまったとる。夢を見る、恐怖の中で目が覚める。彼らが見える——悲惨な状態の人々が。頼む、もう一度、わしは未来に期待する。頼む、わしらはアポロジが必要なんだ。そしたら、和解のことを話せる。

(日本軍収容所から捕虜を解放した元兵士の言葉。一九九五年夏、ロンドン市記念礼拝にて)

はじめに

最近、連合軍の元捕虜・民間人抑留者問題の議論は減少傾向にある。特に英国の問題は語られない。関係者の高齢化やメディアの関心の低迷に加え、イラク戦争での同盟関係強調のために日本の過去が不問に付された上、「捕虜問題・民間和解大成功」説が強調され国内で広まったのも一原因だ。だが、果たして和解は本当に進んだのか？捕虜の長年の悲しみと鬱積は簡単に慰撫されるものか？戦争が生んだ捕虜問題は、六〇年を経て今も数々の問題を抱える。(和解)活動がかえって齟齬と亀裂を深刻化させ、複雑な二次的問題を生んだ面もある。このままでは捕虜問題は未解決のまま禍根を残すだろう。本論では、一二年にわたる英国の捕虜問題のフィールドワーク(儀式・式典・追憶の旅、対日抗議活

動・和解活動等への参与観察)に加えて、捕虜や元抑留者と膝を交えて話を聴き記録・分析するオーラル・ヒストリー調査によって得た捕虜の声をもとに、諸問題を考察する。

一、英国における捕虜問題の 現況

英国の捕虜組織の二大団体のうち極東捕虜連合(FEPOW: Far East Prisoners of War Clubs and Associations)は二〇〇五年夏に解散した。解散式典の説教を担当した牧師は「敵に塩を与えよう。許せないものを許せよ」と呼びかけた。国立戦争記念植物園で開催された式典のラストでは、日本の収容所にいたデイヴィッド・ウィルソン総書記が、有名なコヒマの祈りの一節を唱えた。「家に帰ったら伝えてよ、君らの明日のために、僕らの今日を捧げた、と」。既に結成されていた捕虜の子供たちの会(COFFEPOW)は活動を継続、日本の「残虐」行為の数々を展示した捕虜資料館を、式典当日に同植物園に開館した。もうひとつの大規模な捕虜団体で、日本政府を相手取り訴訟を行った、日本強制労働収容所生存者協会(JLCSA、アーサー・テイザリントン代表)は活動を継続し、今も日本政府に対する個人訴訟の気構えを持ち、ビルマスター(ビルマ作戦退役軍人会)の上層部からも心情的応援が寄せられている。以下、捕虜問題の現状を報告する。

補償問題——追加補償請求権

そもそもサンフランシスコ条約の補償額面は、当時の日本経済困窮に対する配慮と、朝鮮戦争など冷戦構造による再軍備を見込み減免された額であった。それ故、状況改善時には追加補償を要求する権利が実は確保されていた。一九九七年に英国公文書館で『追加補償請求権』（一九五五年）の文書が発見されたが、そこには当時の政治力学が明白に記されている。「追加補償請求権」とは、サンフランシスコ条約の決定事項に対して留保条件を付し、ある国が追加補償を得た場合、同じ利益が他国にも与えられる権利を保証するものだ。ビルマ、スイス他一三カ国は権利を行使して追加補償を得たため、英国にも請求資格があった。だがこの件は〈極秘事項〉扱いとされた。文書第五項には関係者の画策の様子が記されている。（以下拙訳）「英国政府は既に、サンフランシスコ条約において、本来は当然、要求できるはずの内容の多くを、日本の経済復興のために諦めた」、今後も「物的状況の変化が無い限り」その方針で行くべきだが、ただし、「この権利（追加補償する権利）を放棄したわけではない」。文書作成者は「日本に対して英国は現在、すでに不人気だから、これ以上刺激する必要は無いだろう」と伝え、返書では〈外務省が上記の意見に賛成した〉旨と、〈この案件を日本にも捕虜にも公開しない事〉が確認され、追加補償請求権を「日本に対して他の要求をする際の、交

渉の交換条件」にしよう、との提案が行われている。

この文書に基づいた決定がアトリー労働党内閣の時になされた為、一九九八年、元捕虜と抑留者はブレア内閣に対し日本政府への追加補償再請求を要求した。日本は「物的状況」面で十分裕福だし、過去の請求権放棄の決定責任は、労働党としてブレア政権が引き継ぐのが政党内の筋だからだ。結局、一九六〇年に合意された「賠償請求放棄の条項」が有効とされ訴えは退けられた。だが本件は、過去から現在に至るまで、英国政府が日本との経済・国際関係を捕虜より優先させた事実を白日の下にさらし、捕虜の受ける利益を放棄した責任を英国政府が問われる羽目となった。

特別恩賜金——Special gratuity (ex gratia)

結局、英国政府は、元捕虜や抑留者に対し、特別な形式で一種の恩賜金（gratuity—除隊の際の給与金。上層部からの報恩・心づけの意からこの訳語をあてた）の支払いを決定した。カナダ政府やマン島政府が支払った前例もあり、識者や軍関係の団体の上層部は英国政府に働きかけるよう、それまでも示唆していた。ビルマスターの代表スリム子爵も、アーサー・テイザリントンと、極東地域英国元民間人抑留者協会（A B C I F E R : Association of British Civilian Internees Far Eastern Region）代表キース・マーティンをブレアに面会させるよう計らった。日本政府を追求しても望み

薄だし、日本経済を追い詰めると英国をはじめ諸国の経済に影響が及ぶ懸念もあった。その上、日本が賠償すれば、英国の帝国・植民地責任の賠償に議論が及ぶからでもあった。

日英ビルマ作戦同士会（BCFG、すでに解散）のメンバーで日英相互理解に熱心なフイリップ・メリンスは国会議員の署名を集めて英国政府に働きかけた。国会議員の半数以上が賛同、二〇〇一年一月、元捕虜・捕虜の未亡人・元抑留者に恩賜金として一万ポンド（約二〇〇万円）が供与された。この処理により英国政府は、軍人恩給や年金の不払い、戦中・戦後の捕虜軽視の政策失敗の責任を果たした。だが日本の立場は曖昧で、英国に肩代わりさせて責任を取らなかつたとの不評・不名誉は残った。補償の是非、捕虜や抑留者のトラウマや苦痛への責任のとり方、日英の植民地責任、JSP等日本側の受けた苦痛に対する責任に関する議論は宙に浮いた。

裁判の経過と結末

Enfieldの額面一万ポンドは捕虜・元民間人抑留者の日本政府に対する補償請求額とはほぼ同額であり、英国政府がカネを出せば捕虜の敵意や拘りも消え訴訟も終わるとの目論見もあった。だが日本強制労働生存者協会は、恩賜金は英国政府自体の責任解消であつて、日本政府の人道上の義務や責任、企業の責任は相殺されないとして、訴訟を継続した。

英・米・豪・ニュージーランドの元捕虜と

民間人抑留者が起こした損害賠償請求訴訟（九五年提訴）は、結局、東京地裁（九八年）・高裁（二〇〇二年）・最高裁（二〇〇四年）に続けて棄却された。米国を通して起こされた企業の未払い賃金訴訟は、法律を変え訴訟を可能にする動きが進んだが、九・一一事件後、流れが急変した。対イラク戦への日本参加要請のためにも、米国政府は軍の過去の軋轢は解決済みとの態度に変化し、請求は棄却された。

だが、捕虜らが（テイザリントンのグループに限らず）拘るのは、「日本政府が過去の所業を認め責任を取る事」であり、彼らからみた「正義（justice）」の遂行であって、金銭は本来の目標ではない。ゆえに英国政府の恩賜金で訴えが終わる事はあり得ない。実際、捕虜らと長く付き合っていると、「補償」「謝罪」の要請はシンボリックな事象なのだと思える。それは交通事故・傷害罪・殺人事件の賠償に似ている。失われた貴重な家族や過去が戻る訳ではない。だが、「つぐない」「すまない思い」を実体化する賠償により、被害者は、害を加えた側が真に悪いと反省した事を納得しやすくなる。「つぐない（atonement）」には（すみません、本当にやったことは悪かった、ごめんなさい）という認証・謝罪（recognition/apology）を伴うのが自然だ。換言すれば（悪かった）と思うなら当然、損害の償いが伴うはずで、モノだけ渡して謝らないのも、謝るだけで償いをしないのもどち

らも不自然な訳だ。日本で会社を経営した経験をもちビルマスター会長のスリム子爵（ビルマ戦線のスリム將軍の子息）は「日本側は物品のつぐない（atonement）と謝ること（apology）を混同し、モノを渡せば気持ちが通じると思ってしまう」と指摘する。

二、「謝罪」と「お詫び」

「日本はいつまで謝ればいいのか」との苛立ちをよく日本メディアで耳にする。だがテイザリントンら捕虜たちにとって「まだ日本は一度も（シャヤイ）していない」のである。この認識のズレを日本人は知る必要がある。確認するが、日本政府が、英国・オランダ・韓国・中国・米国ほか、戦争責任において「謝罪」の用語を使用した例は無い。メディアが「日本が謝罪」と題するので誤解されるが、日本政府の用語は「遺憾」「お詫び」だ。日本政府が「謝罪」という言葉を使わないのは何かを迂回しごまかしているからではないか、と元捕虜らは感じている。

SHAZAIとOWABI

アーサー・テイザリントンは、泰緬鉄道なみに死亡率の高い台湾・金瓜石収容所で過酷な捕虜時代を送った。日本政府に対する彼の戦闘的な態度は英国ではよく知られている。メディアで捕虜問題というと彼が出演し、天皇訪英時のデモを組織したのも彼だった。（捕

虜の中には彼の振舞いを独善的・無礼と敬遠する者もいる）。日本軍の捕虜扱いへの怒りは強いが、彼は日本人嫌いではない。日本関係の蔵書も三〇〇冊近く、庭に日本庭園を作ったり八〇歳を越え日本語を習い始めるなど、とにかく日本に拘っている。

彼は一九九八年、(owabi) のような「スパーマーケットで人がぶつかっても出るような言葉ではなく、本当の言葉が欲しい」と大使館の沼田公使（当時）あてに手紙を出した。沼田公使の回答の概要は（「オワビ」は本当に謝る言葉であり、そんな軽いものではない）だった。日本大使館は「オワビもシャヤイも一緒の意味だ」と強調したが「同じなら何故シャヤイを使わないのか？」という疑問が返された。テイザリントンは豊島の産業廃棄物問題で香川県知事が「謝罪」した（二〇〇〇年）折の『説売新聞』の記事を入手し、「謝罪」の漢字を指で叩きながら、「大使館もスマタも、日本語では謝るのにシャヤイは使わない、オワビだと言う。だが、やはり正式にはシャヤイを使ってるじゃないか」と青筋を立てて怒った。

日本側が選ぶ言葉に文句を言うのはけしからぬと怒る向きもあるが、日本側が強硬に突っぱねると、余計に元捕虜らは、「本当には謝っていないのではないか」という疑念から自由になれない。幾度も発される「オワビ」は、補償を避けるためのおごなりの装置ではないか、という疑念を招くのだ。

村山・橋本首相のオワビと、外務省の工夫

一九九八年五月、橋本首相がサン紙に「お詫び」の公告を出した際、首相は文面作成の任にあたる人々と（個人訴訟が起らないような言葉遣いにしないといけない）事を確認し、「謝罪」の言葉を避けて「お詫び」にしたという。認罪は国際法的に経済補償に道を開くからだとされる。用語と補償は無関係との説もあるが、「謝罪」という言葉を回避する意図が存在するのは確かだ。

一九九五年に出された村山首相の「お詫び」に対する英語訳「apology」が公式訳ではないと指摘した捕虜らに対し、大使館は三年後の橋本首相の言葉には「お詫び≡apology」を公式訳とする事で応じた。結局「シャザイ」は使用されなかった。同年八月、天皇訪英の折の「深い心の痛みを覚える」とのお言葉も一般人の評価はある程度受けたが、捕虜らを完全に納得させなかった。「心の痛みなら俺らも感じてきたさ」と怒る者もいた。極東捕虜連合の書記ウイルソンは、満足はしないが「天皇なりに、できる限りの事を言ってくれたんだらう、と思うよ、たぶんね」と遠い目をしながらつぶやいた。

何故、シャザイにこだわるか

捕虜らはなぜ「正式な言葉」に拘るのか。補償も一要因だが、補償を求めない者も「正式な」言葉は求める。マナーとコード（儀礼）の正式さに拘る伝統もあるし、真摯（genuine）

に謝ってもらった上で、心から納得して許し・忘れたいとの願いが強い。人間として対等に扱われたい、という需めもある。捕虜にとつて、「謝罪」は、非人間的に消耗品扱いされた自己が、今度こそ、日本政府と日本人から人間として認証され、対等になる証明といえる。

それ故、捕虜を慰撫して物事を丸く収める態度は苛立ちの元だ。捕虜・ビルマ戦線兵士・和解活動家らを招いた日本大使館主催のパーティを訪れたティザリントンは、沼田公使に誘われて大使館作成「友情と和解への道程」ビデオを見た（恵子・ホームズ氏の活動、小菅信子氏が跪き祈る慰霊碑献花、平久保正男氏ら日英元兵士の交流、捕虜の孫の日本滞在プロジェクトを紹介し（日本政府は和解にこれだけ努力し今後も努め続ける）とする日本政府和解活動紹介（情宣）ビデオである）。ティザリントンは「おべっかだ！（媚び屋）Sycophant」と憤怒に燃え「人生最悪の経験のひとつだ」と告げ席を立ち、大使館パーティ参加もその後止めた。彼が望むのは、甘い慰撫ではなく、正面から彼らの訴えに耳を傾けてもらい、議論することなのだ。

捕虜や家族にとり「謝ってもらうこと」の必要性は強く、その心理は複雑だ。多くの元捕虜や抑留者は有罪感や無力感、自己否定意識に悩む。四年間、まともな人間扱いを受けず、見張られ、行動を制限され続け、虐めら

れ続けると、人は尊厳意識が減り自分の存在意義を肯定できなくなる。あるオランダの元抑留者は、彼を感じる「自分は価値の無い存在だ」という虚無感と罪責感」は、レイプ被害を受けた女性が自分を責めてしまう態度に似ると喩えたが、「いじめ」被害者の心理に通じる部分もある。トラウマから家族関係や心身の不調に悩まされ、無力感に悩む者、サバイバーズ・ギルト（生き延びた負い目）に苦しむ者にとつては、死んだ仲間や家族の為に、謝ってほしいという願いは切実だ。

捕虜が日本からの謝罪が必要とするのは、彼らを苦しめた責任主体が日本政府にあることを確認し、自らを責め・否定する感覚から解放されたいからではないだろうか。「謝罪」——すまない、ごめんなさい、貴方にしたことは間違っていたとの言葉——により、責任者は明確になる。天皇の「深い心の痛み」や「遺憾の念」は主観的で責任の所在も曖昧であり、その代理にはならない。責任主体に「すまない、悪かったのは私だ」と言ってもらわぬ限り、元捕虜や抑留者の自己否定感・自責の念は解消しないのだ。

誰が謝るのか？——未亡人の声

日本政府に正式に謝られた感覚は、捕虜には希薄だ。補償金を求めない者もその点に關しては一致する。スコットランド捕虜連合代表、故トム・マガウランの未亡人アイリスは連合の書記役を務めた。長年多数の捕虜と家

族を纏めてきた経験の持ち主だけあって、彼女の意見は明晰だ。アイリスとトムは、英国全土で二〇〇以上の地方紙を抱える大会社の重鎮であり、家族三代にわたり報道に関わっている。アメリカ始め各国から最新技術を導入などの功を認められ政府からM・B・E. (大英帝国勲五等) を受けた。トムは長年スコットランドの捕虜月報 (POWOW) の編集に携わり、それを元に本を編集、それが引き金となったか癪を患い、収容所時代の悪夢に苛まれつつ息を引き取った。音楽を愛し日本人にも優しくかったトムの最期は、捕虜時代の記憶とトラウマのもたらす苦難の中であった。家の浴室には、恩賜金で作った、病身のトムが座ったままシャワーを浴びられる設備——わずか二カ月しか使えなかった設備が残されている。

アイリス「私らはもうお金を手にする事はな
いと思うわ。正直言って、これ以上手に入
ることはないでしょう。もし受け取っ
たら驚くわ。私は——私たちの政府がお
金をくれたのだから。もしその分を日本
から取り返す事ができたら、それはそれ
でいいことだわ。それがいいわ。でも、
個人的には、日本からお金が来るだろう
とは思わない。でも、謝罪はあればいい
でしょうね。(ごめんよ) というのはそ
んなに大変なことじゃないわ。つまり、
私たちも何百年も前から大英帝国がやっ

たことを謝っているんだから、まだこれ
から謝らないといけないんだから、だか
ら日本も問題に直面して『ごめんさい。
これをやったのは私たちの知らない世代
です、そうして、彼らがやったことのた
めに私たちは謝ります』ってね。私たち
は受け入れるだろうし、それで物事に片
がつくでしょうね。そこから新たに物事
が始まるよ。もしそうなったら素敵だ
ろうけど、そうなるかしら？ 私にはわ
からないわ」

中尾「それを言うのは誰でしょう……。誰がそ
のメッセージを？」

ア「たぶん捕虜の妻に対してでしょう」

中「それで、でも誰が？ 政府ですか？ 天皇で
すか？ だれがそれをするのか——民か？」

ア「わからない、わからないわね」
中「誰が一番ありがたいですか」

ア「私は、ありがたいわね！ (笑)」
中「いえ、私というの……誰が貴女に謝るの
でしょう？ つまり、誰が謝るのが一番
(貴女にとつて) ありがたいでしょう」

ア「そうね、天皇が責任をもっていたのだから、
天皇が精神そのもので、日本の一番
主要な人物でしょう。この頃は知らない
けれど、それともその息子かしら、どう
思っているのか知らないけれど、でもも
しそういうことができるガッツのある、
彼らのうちの誰か重要人物 (celebrity) だ
ったら、その人は尊敬されるでしょうね。

でも彼はそうしてないし、だから尊敬さ
れもしない。尊敬の念を受けないの。も
し彼が『日本国民のために、私たちは、
これこれが起こったことについて、すみ
ませんでした』と言うなら、受け入れら
れるのは確かですよ」

英国では王政支持者は天皇を重視する傾向
にあるが、スコットランドの女王メアリの礼
賛者であるトムたちも、日本の代表者を天皇
とみなす。九八年の今上天皇のメッセージは
トムたちには効果がなかったようだが、まだ
このように謝罪への期待があるのは、日本を
対等とみなす態度がみられるだけ好意的な方
だ。(日本人には罪の意識や謝る能力が文化
的に無い) とする記事が、メディアに大きく
出る事もあるお国柄なのだから。

心に届かぬサン紙の「オワビ」

——階級格差社会

九八年五月、天皇訪英直前にザ・サン紙に
掲載された橋本首相の「お詫び」は筆者が聴
き取りをする限り、元捕虜の間では不人気だ。
選挙前に保守紙のサン紙が「労働党にもチャ
ンスを」とブレア応援キャンペーンをはった
見返りに「オワビ」掲載の権利を得たとする
解釈も出るほど、お詫びの世俗紙掲載は驚か
れたし、唐突だった。ある捕虜が慎ましくか
つユーモラスに抗議をしたように「ご存知の
ように、できるかぎり少ない衣料を身に着け

た女性が載っているような」新聞に首相の声明が掲載された事は衝撃だった。お詫び公告の紙面には「日本、サンに謝る」(Japan says sorry to the Sun) というタイトルが踊る。

「サンに謝ったんだらう、自分たちにじゃないよ」と不快感を表す元捕虜もいる。日本政府は通俗紙に掲載すれば広範な層に届くと見込んだのだらうが、サン紙の階級的な位置づけと英国の格差社会のダイナミズムの中では逆効果である。お詫びが出た後に面談したアーンズロー夫人(元・香港抑留所)は「私たちがサン新聞を読むと思ったなんて、なんていう侮辱でしょう！サンに出たことはミステクだと思いません」と述べた。補償や謝罪を願う捕虜や抑留者たちは、サン紙を好むような知能程度、低俗・非裕福層、金目的の人間(「労働者階級」として侮られたと感じた)。

「ま、メディアコントロールですよ」とは、ある日本人政府関係者の言だが、確かに橋本首相のオワビは、英国メディアの過熱報道を冷まし、過激な論調の新聞に勝利を与え満足させる効果はあった。その後の、裁判棄却報道の際は日本批判の語調は相変わらず強かったが、だが、元捕虜全員に届いたかというところでもない。元捕虜ら高齢者の層にとつては、サン紙は品の無い新聞として販売所で買うのも躊躇われるメディアだからだ。橋本元首相のお詫びの件は、全国の地域紙を押さえるアイリスも知らなかった。

中「首相のオワビをどう思われますか?…新聞社に関わってらっしゃるなら—もしかすると反感があるかもしれません—一九九八年に、天皇訪問のためかもしれないが、ある種のアポロジをサン新聞に出したんです」

ア「まあ、あれは掲載するには、クズの新聞よ。ライジング・サンでしょう?」

中「いえ、サン紙です」

ア「知ってますとも、でも私は、ザ・ライジング・サンと呼ぶの(筆者注…ライジングには新参・売り出し中・成り上がり等の意味がある)。ダメよ、もつと—サン新聞ほど口汚く(scurrilous、罵る)ない新聞に載せない。それは、まあ、真のお詫びとなるには、ベストじゃなくても一番よく知られている(best known)新聞、タイムズ紙とか(デイリー)・テレグラフ紙とかに掲載されれば、他の新聞もそれを取り上げ続報されるだらうし。…あるいはBBCで放映するとか、そうしたら私たちは受け入れるでしょうね。でもそれまでは、私たちは待つわ。—もしかすると(謝罪がくるかも)つてね。—でどうなるでしょう。どうやってそれ(謝罪)に届くかしらね。わからないわ。もしそれが自発的にくるものでなければ、結局は来ないでしょう」

中「自発的というのは大事ですよ。強制的に『ごめんなさい』と言わされても、それは」

ア「それは—それは正しくないわ。それには意味がないもの。言えと請われたから言っただけだから。でもそれが、起こったことの結果として来るものならば—いいでしょう。でも早くしないと、オールド・ボーイは皆死んでしまいわ。みんな、歯が抜けるようにね—」

三、民間人の和解? ——「村山資金」

政府レベルのオワビがうまくいっていないとすれば、では民間同士の和解はどうだろうか。日英和解というと、恵子・ホームズ氏の活動、捕虜を日本に招待する旅が知られる。「戦後和解」の著で日英和解の成功を謳う小菅信子も、ホームズ氏の活動が国旗を焼いたジャック・カプラン初め多くの元捕虜の心を溶かしたと賞賛する。だがメディアの好意的な報道と捕虜全体の実情はかなり隔たりがある。

そもそも、元捕虜の旅は、英国人の夫を事故で亡くした恵子・ホームズ氏(以下敬称略)が故郷の捕虜の慰霊碑の存在を捕虜に知らせ、日本人の捕虜に対するケアを伝えて憎悪を和らげ、神の愛を伝えたいと願い、「神が彼女と一緒に働こうと語りかけた」事から始まった。彼女は当初、事故死した夫の慰謝料、日本文化の催しを行い集める募金、個人寄付、企業の協賛金を元に捕虜の旅を敢行した。だが九〇年度半ば、捕虜問題が国際問題として

浮上しオランダ、イギリス国内で補償要求の
声が高まり日本大使館が対応を迫られて以来、
状況が変化した。

一九九五年、英国バタシー公園恒例の日本
祭で募金活動中の恵子・ホームズと元捕虜ピ
ル・ノトリーらの前に大使館員が現れ援助を
申し出た。それから、民間で行われていた交
流活動に外務省が乗り入れる形で、「和解政
策」が立ちあがった。恵子・ホームズはその
後、「アガベ」というチャリティ団体を結成、
そこに外務省も募金する方法で、捕虜の日本
訪問は継続した。二〇〇五年で資金は終わり、
それとともに「アガベ」主催の捕虜旅行も一
応の区切りを迎え、今年からは自費で行う。

この「民間」を通じた「和解」政策は、平
成七年度発足の「女性のためのアジア平和国
民基金（アジア女性基金）」と共通項がある。
女性基金と異なるのは、財源が、平成六年
（一九九五年）、村山元総理の「お詫びと反省」
の談話発表後に組まれた総額一〇〇〇億円の
「平和友好交流計画」予算であることだ。こ
れは歴史的和解をめざし、アジア・ヨーロッ
パを主たる対象に学術・人的交流、歴史資料
の拡充を行う目的で組まれた予算だ。英蘭で
は、捕虜・抑留者問題が重視され「平和友好
交流計画」に基づき平成七年から一〇年にわ
たり各種事業が展開した。政府が直接託びた
り補償金を払え（わ）ないため、民間交流の
枠組みによって被害者の慰撫と歴史問題軋
の解消がはかられた訳だ。

日英和解への厳しい眼差し

日本で好意的に報道される恵子・ホームズ
の活動には、元捕虜間で厳しい見方、微妙な
警戒意識が強い。捕虜の懐にはいつてフィ
ルドワークをすれば、すぐに気づく事だ。た
だ礼儀を重んじる英国人の言説は二重（本音
と建前）化する場合も頻繁だ。特に、西洋か
らキリスト教を伝え、文明化を果たした相手
国の、東洋のクリスチャン女性の活動を批判
する事に対しては遠慮がある。だが、不満は
次第に日英両方で溜まり、顕在化した。鬱屈
や憤りは昔から耳にするが、最近の例を幾つ
か示すとしてよう。

二〇〇三年、国立戦争記念植物園の国連コ
ーナーに日英「和解と友情の石」が設置さ
れた。それと同日、公園内を徒歩二〇分ほ
の離れた距離にある極東捕虜の記念樹や記念
碑が立つ場所で「スマトラ鉄道記念碑序幕式」
が開かれた。居合わせた捕虜夫妻は、共同通
信の記者を除く唯一の日本人参列者の私に
「あんたみたいな人を知っているわ。捕虜に
近づいてきて、日本に行け、と言うんでしょ
う！」となじった。私が自分の立場（記録と
実態説明・相互理解）を伝えたが、「恵子・ホ
ームズのことはよく知ってるわ。彼女は私た
ちの団体を（本当に）まっぶたつにしてしま
った。恵子が来るまでは極東捕虜連合はすば
らしいクラブだったのよ、でも彼女が今やり
たいのは日本に行く捕虜をつかまえる事で、
おかげでクラブは分裂してしまったの」妻は

憤懣やるかたない。傍らで元捕虜の夫は嘆い
た。「ケイコは、僕が日本に行かないと本当
のクリスチャンじゃないって言うんだよ」。
また、二〇〇五年、王立退役軍人会主催のシ
ンガポール戦線と泰緬鉄道の遺族・家族・元
捕虜の慰霊旅行に同行した際、参加グルーブ
の中で際立って筆者を敵視し、連れの娘とも
口をきかせぬ未亡人がいた。彼女は「日本人
には残酷さの遺伝子がある」と言うほど、日
本軍の捕虜扱いに怒っていたが、旅行仲間が
後から伝えるには、旅にBBC「宗教の時間」
の取材者が参加していた事もあって、未亡人
は私をキリスト教系の恵子・ホームズの（手
先）²³ と思い、日本旅行に連れだす目的と誤解
していたのだった。

恵子・ホームズ自身は、政府から援助を受
け始めてから「神が外務省に触れて私たちが
助けてくれた」と、より一層信仰を強調した。
だが外務省による和解政策の一環であること
と、彼女の目指す「捕虜の魂の救い」すなわ
ち福音派キリスト教伝道とは、矛盾する部分
があるため、いきおい不自然さが残る。捕虜
らもそれを感じた。アイリスはスコティッシ
ユらしい直裁さで述べた。

「そうねえ。つまり、（日本旅行に）行きた
い人は行けばいいし、それを楽しめばいいし、
それに別に反対はしないわ。ただ、彼女（恵
子）がそれを持ち出すやり方が―それが―何
か、まっすぐ（straightforward）じゃないの。
わからないわ：私は彼女から距離をおいてる

：（捕虜たちには）表面化しない思いがあるけど（undercurrent）みな、礼儀正しすぎて、本当に思ったことが言えなかった」。本当に思った事とは何かという問いに、「たとえは——『私らは、（日本に）本当に、行きたくないんだ』とか『どうしてそんなに熱心に私たちを行かせようとするんだい？』とか、『これはいったい、あなたになんになるんだい（what's in it for you?）』これは英国式表現ね——つまり『それをする事で貴女は何かを得るのかね——これをする事で経済的な見返りを得るのか？それとも、心からの善意からか？』——一体全体、なんでこれをやっているんだね』ってことね。こういう疑問に対して、わたし達は、一度も、満足の行く答えや説明を得たことはなかった。一度もね。いまだに不明だし、どんな仕組みなのかも知りたくないわ」。

テイザリントンは村山資金の事を知っているため、さらに手厳しい。

「〔和解〕というのはダーティ・ワードだ。他のことをごまかすための方便だ：神が恵子・ホームズに語ったというなら、なぜ俺に語らないんだね！ああケイコ・ホームズ、ケイコ・ホームズ！彼女は頭痛の種だ。僕は彼女には用がない。会う必要もない。僕が訴えているのは日本人じゃない、日本政府だ。日本人となら僕はすでに友達はいるよ：恵子は和解の宣伝塔で、裁判を打ち消す政府のキャンペーン・ガールだ：日本に連れて行かれて、

和解の旗頭なんかにされるのはまっぴら御免だ、僕は自分のやり方で日本に行ってるよ」。

恵子・ホームズが八〇年代に、初めて捕虜集會に飛び込み、入鹿の捕虜の墓の写真を見せ日本の良心を訴えた行動は確かに勇敢ではあった。だが度重なる捕虜集會への参加や日本旅行の勧誘に苛立つ捕虜や妻も多い。未亡人ヒルダ・デイヴィースは捕虜たちが恵子・ホームズの周りに集まる様子への不快感を語るし、ウィルソンの妻アイナも「微妙な感情があるの」と語った。アイリスは「彼女は人気がない」といい、「いったい全体、彼女はここで何をしているんだ？」「こんなところに来るなんて、ずうずうしい！」と思う者が多かった」という。

実際、フィールドワークでも非常に気を使うが、捕虜にとつて、日本人の姿はトラウマを惹起する恐怖刺激の一つでもあり、捕虜の共感の場である集會でまで日本人を見たくない者は多い。恵子・ホームズは神の与えた試練と耐えるだろうが、彼女の場合は和解＝懐柔策と理解されたため捕虜らの警戒も強かった。

「和解の旅」のもたらした亀裂

恵子・ホームズ氏の旅で日本を訪問した捕虜が、帰国後辛い目にあう例は拙論『捕虜はなぜ（和解）に領けないか』で二〇〇〇年に報告した²⁶。捕虜クラブの内部亀裂や日本に好意を持った捕虜の孤立は、その後も継続した。日本メディアや和解活動家が伝える捕虜の美

談の「その後」は悲惨な例がある。トム・マガウランの無二の親友だったニツクのケースがそれだ²⁷。

恵子・ホームズは捕虜集會でトムを誘ったが彼は泰緬鉄道の捕虜で日本に関心はないと断った。向島収容所にいた経験のある捕虜ニツクは誘いに乗った。以下はアイリスの語る後日談だ。

ア「ニツク・カーターは日本に行つて、それでその事で一杯になって帰ってきた：。（略）ニツクは、五人か六人で行つて、どこかの場所で、日本人と一緒に花輪を捧げたの、それが、多くの人に嫌な感じを与えたのね、あそこまで酷いことをした事（捕虜扱い）に対して、そこまでののは友好的すぎると。ま、もともとニツクは一番ましな時でも、問題児だったしね！捕虜の事には熱心だったし、いい記録も残したし——今は義理の息子のことと陸軍省と帝国戦争博物館にあると思うけど——でもニツクは恵子の旅に行くことでたくさんの人々を色々と苛立たせたし、そして帰国してからは、そのことで悪く言われて苦しんだの」

中「旅に行ったからですか？」

ア「旅に行ったから、それと——彼は——彼が——日本人とジョイントでいったからよ、記念碑か何か、（日本人と）一緒に花輪を置いたから——場所はどこか知らないけれど。それについては、嫌な気分になつ

「人がたくさんいたのよ」

中「でも、それは彼が話したのですか、それとも書いたのか」

ア「彼は書いたし、自分の住む地域で話したんでしょね。でも彼の属するクラブ（極東捕虜連合の地域団体）も好まなかった。ヨークシャー支部もよく思わなかった。それと彼はロンドンのクラブにも入ってたけど、彼らもよく思わなかった。どこか別のクラブも。それで、ニックは、自分は正しいすべきことをしなかったんだと、本当に思っつ（the really felt he had not done the right thing）——不幸なことだね。でも彼らはよい待遇を受けたようだし、日本人の家族に滞在したりでも——その、だからといって（ニックが）トムと和解することにはならなくて、不幸なことだわ、だって何年も何年も何年も彼らは親友だったから。不幸なことね」

中「ニックはまだ生きていますか？」

ア「いいえ、ニックはトムのすぐあとに死んだわ、ニックは（二〇〇四年）六月に死んだ。トムは三月、ニックは六月に」

ニックの日本訪問は、恵子・ホームズ著『アガベ 心の癒しと和解の旅』『心癒しと和解の旅——広島・因島・向島』の章に、和解の大成事例として活写されている。それによれば、ニックが花輪を捧げたのは、広島向島の収容所跡に南沢満雄牧師らの先導で建立

された、捕虜の苦難の歴史を刻んだ「メモリアルプレート」と「平和と友好の記念碑」であり、二〇〇二年のことだ。ニックは代表としてテープカットし「アガベ」が用意した白い花束を捧げた。地元メディアも彼に注目した。終戦直後に会い、ニックがずっと写真を持っていた収容所近辺に住む女性と、彼はパティで劇的な再会を果たした。それを奇跡と捉えた恵子ホームズ氏は感動して次のように綴る。

「その夜、みあげた星空はとでもきれいでした。『神様、あなたはなんて哀れみ深く、恵み豊かな方でしょう。わたし達の心の願いを叶えてくださる素晴らしいお方。イエス様、心から感謝の賛美を送ります』私は心の中でそう叫びました。後日、この夢のような再会の場面は『ニュースステーション』で放映されたので、ご覧になった方もいらっしゃるのではないでしょうか」。

ニックが献花し、演説をするのを聞いた彼女は神の救いの大きさを思う。

「弱弱しく苦々しさを秘めていたあのニックはどこかに消え去ってしまいました。生まれ変わった、清々しいニック：『やったね、ニック！』彼のスピーチの通訳をしていた私は、こぶしを振り上げてそう叫びたいのをぐっと我慢しました。目頭が熱くなって、：大空に広がる神様の大きいなる御手を感じました」。

彼女が神に感謝し、読者がその和解エピソードに感動している間に、本国に戻ったニックは茨の道を辿っていた。英国で捕虜体験を理解してくれる、僅かで貴重な友人達からも疎外され、トムとの友情も崩れた。結局、自分の行為を後悔して亡くなった彼のその痛みを誰が担い、責任を取れるのだろうか？ニックの死までの苦しみは日本に届かぬまま、恵子・ホームズの本の中で彼は微笑み続け、ドキュメンタリーで放映され、研究者・和解研究家に引用され「戦後和解成功説」として表象され続ける。

彼は最初は兵士として英国政府に、次に捕虜労働力として日本軍に利用された後、さらに別のもの——「和解の成功」「キリスト教の勝利」「大使館の政策は成功」という言説と、それによって益を受ける人々に利用されていないか。これではニック・カーターは浮かばれず、彼の真の悲しみは行き所がない。似たような体験をする捕虜は数多くいる。コヴェントリーで日本大使館も参加する和解礼拝で常に花輪を置く役目を果たし、大使と写真に写る元捕虜レス・デニソン（二〇〇六年死去）も息子の離反に苦しみ、個人的な場では心に溜まる疼きや諦めを筆者に語り続けた。

日本側には、ニックの孤立と英国捕虜らの拒絶は狭量に映るだろう。だが、捕虜たちの積年の感情からすればごく自然なりアクションだ。捕虜らが感じる許しがたい思いはそれだけ深い。そもそも日本人に会える人は憎悪が中和された方に属する。ましてや日本訪問

の決断ができる捕虜は、戦時中に日本人とならんかの交流があるなど日本人への関心を持ちえた一部の者でしかない。和解旅行で善意のクリスチャン達に歓待され、許し、捕虜時代の悪夢が良い経験に置換されて癒されるセラピー効果も確かにある。だが感動のモーメントが過ぎれば帰国後ゆり戻しを起こす者もいる³⁰。

民間人による「謝罪」代行

恵子ホームズのツアーの特色は、日本側の善意の代表に加えて、謝罪の代行にある。捕虜に配られる旅の葉には、過去の首相のお詫びの言葉が印字され、歓迎パーティでは参加者が「ごめんなさい」と言って回ることもある。パーティに参加した捕虜調査家の笹本妙子や在英歴の長い高尾慶子がその著に記すように、「シヤザイ」に違和感を覚える者は多い。あるパーティで元捕虜収容所監視員が土下座をして謝った事から、感動的だとしてそれは恒例化した。捕虜監視員でない場合は牧師が跪く事もあった。「跪く」行為に対する欧州の文化意識は別稿に譲るが、ともあれJSP研究会所属の元学徒兵の大庭定男は「これは和解ではない」と抗議を申し入れ、表立った土下座は姿を消した。だが、捕虜達が礼拝のため招かれるアガベの中心拠点の教会では、捕虜の前で信徒が次々と跪き、罪の許しを請う行為は続いた。日本人の「謝罪」に感動し、自らも跪いて「わたし達の罪も許して」

と反応する人もいるが、ジャック・カプラン夫妻をはじめ、土下座にとまどい「こういうやり方は間違っている」と思う者もいる。直接の責任の無い人々が次々に謝る、主体の不明な「シヤザイ」は、捕虜にとつては対応困難なものだ。

キリスト教の布教

また、アガベの旅では熱烈な福音派のキリスト教伝道活動が伴う。恵子・ホームズからすれば、神を信じれば許せるし、捕虜は許すことで、魂が救われねばならない存在だ。入鹿村の収容所捕虜、通称イルカボーイのビル・ノトリイは、ホームズの活動の初期からの応援者で、今も日本人のホームステイを手伝っている。だが彼は、自分もキリスト教徒だが、現在ホームズが行っている伝道は肯定できないと慨嘆した。ホームズの通う英国の教会の礼拝で、ビルは「神の癒しによって日本を許した捕虜たち」として壇上で紹介された。「この捕虜の人たちのように、神を愛し神を認める事ができますか！自分の罪を認める事ができますか！」という牧師の呼びかけに彼は落胆した。ビルは恵子の活動で「神は使われ、悪用されている (God is used and abused)」と言う。愛する「ケイコ」の批判をするのは辛い。だが、やむをえないと決意し彼は語った。「いいかい、ね、君はこういう事を託すには相応しい相手だと思っただ、そろそろこういう事も話さないといけない時

期なのだ」。彼がそれを語り始めたのは九七年、もう一〇年前のことだ³¹。

再び消える責任主体

キリスト教による和解は、英国人にとつては受容しやすいと思われがちだ。幼児期に伝えられたキリスト教から離れた事に晩年に有罪意識を抱く高齢者が、恵子・ホームズの福音派伝道に惹かれる側面もある。だが、第一章で論じたのと同じように、ここには責任主体が曖昧になる陥穽と、捕虜がさらにフラストレーションに陥る仕組みが存在している。この点を考察してみよう。

恵子ホームズは「謝られて困惑する人たち」は「赦す気持ちのない人たち」だと容赦ない。「キリスト教の思想が根底にある人たちの多くは、謝られれば赦さなければならぬと思っっているようで、それができない人たちの中には、謝られることを極端に嫌う人たちもいます」。謝る事に違和感をもち「くどくどと文句を言う」人もいるが、それは「日本人が謝ると日本が批判しにくくなる、ということもあるでしょうし、日本人には頑なでいてもらう方が都合のいい人たちもいるのです」と理由づける(「アガベ」二四九頁)。

しかし、主体の曖昧な謝罪は捕虜を追い詰めてしまう。日本に対して「許さない」と思うとき、捕虜は内面の苦しみを抱く。それは、ホームズも言うように「謝られれば許さなければならぬ」、許せという命令に従わない

のは神への造反と感ずるパラダイムが彼らの文化と伝統の中に存在するからだ。

だが、許す捕虜、許せない捕虜という二分方法に従うと、許さない人間は神を認めない悪い信徒・人間という立場に追い詰められ、自責の念を持たされる事になる。これは捕虜を巡る政治的責任主体（ガヴァニング・ボディ）が、日本人から、超自我的懲罰主体の「神」へと、ずらされるからである。「謝られれば赦さねばならない」という枠組みの中では、対立項が、日本人（日本政府）対捕虜から、〈許すことを求める神〉対〈許すことができる／できない自分〉——つまり、神対自分という二者関係にシフトする。許す・許さない選択は、個人の主体の問題となり、捕虜を過酷に扱った責任主体の日本軍（政府・日本人）の存在は盲点となり、消滅してしまうのだ。

以上、責任主体が消える現象を内包する「和解」の実相を伝えた。今回は、国旗を焼いたジャック・カプランの例をはじめ和解の現状のさらなる掘り下げとともに、日本側に存在する、「謝罪」を押しとどめる心情と理由を整理し、真の相互理解に基づく「和解」の今後の方向を検討してみたい。

（ななお・ともよ／岡山大学大学院准教授）

- (1) 小菅信子「戦後和解」中公新書、中央公論社、二〇〇五年、石橋湛山賞受賞。恵子・ホームズ「アガベ、心の癒しと和解の旅」いのちのことは

社、フォレストブックス、二〇〇三年一〇月。馬場公彦「ビルマの竖琴」をめぐる戦後史」法政大学出版局、二〇〇四年、第七章「日英和解劇の中の「竖琴」」。

(2) フィールド調査期間…一九八三年、一九九四年八月〜現在。フィールド・メインは英国。米国、オランダ、ニュージーランド、タイ、ミャンマー、シンガポール、マレーシア、ケニア。参与観察・アガベ（恵子・ホームズ氏の集会）ほか和解活動集会、BCFG（ビルマ作戦同士の会）、BCS集会・議会、和解式典、英国暁星高校日英対話授業、ビルマ戦線ヨーク部隊記念礼拝、ビルマスター中部記念礼拝、戦後五〇周年／戦後六〇周年の毎年の対日勝利記念日・戦争記憶週間、天皇訪英時・訪蘭時のデモンストレーション、FEPPOW関連催し、英国主催捕虜と家族の「追憶の旅」、捕虜関係会議、横浜連邦墓地慰霊祭、BC級法務死者慰霊祭、ビルマ戦線関係各種戦友会記念式典（東京・岡山・四国）、オランダ日本の架け橋運動、米人捕虜の諸活動、アガベの旅、JSP研究会・POW研究会ほか各地のアーカイブ他。

捕虜らのインタビュー、オーラル・ヒストリー映像資料は、現在五五〇時間、公開を待つ。本論で引用した口述記録はDVD映像と共に、科学研究費研究成果報告書（平成一八年）「日本軍に抑留された連合軍捕虜とその家族のオーラル・ヒストリー 戦争の記憶に基づく日本イメーজ形成…ジェンダー変数による分析」掲載。口述記録を確認したい場合、Htak@ccokayama-u.ac.jpに連絡されたい。捕虜との関係性や分析は科研の報告書及び「戦争・植民地にかかわるビジュアル・オーラルヒストリーの方法」（東京外国語大学 史料ハブ 地域文化研究 No. 2, WEB掲載）及び近著を参照されたい。

(3) 日本政府は、捕虜問題の補償はサンフランシスコ条約で解決済みという態度を崩さない。一九五一年締結の講和条約で定められた賠償規定により、日本は国際赤十字に対して四五億円、海外の凍結日本資産をあわせて合計五九億円を連合国側の一四カ国に支払った。英国の割り当て分は約一六三万ポンドであり、元捕虜には一人七六・五ポンド、民間抑留者には四八・五ポンドが五年間の分割で支払われた。額の多寡に関しては、当時の為替レートゆえに日英間で感覚のずれが大きい。捕虜や抑留者にとっては失った健康・財産や、捕虜取り扱いが原因の後遺症治療に見合う額では無かった。(4) 本文書を発見した元抑留者が、出所を明確にしない約束で一九九八年に筆者に複写を手渡した。(5) 同じ理屈により、日本の過去の戦争責任は継続した政体（ポリテイ）である現政権が引き継ぐ。(6) JSP 降伏日本人兵士。敗戦後、ジュネーブ条約を適用されない状況で、降伏後、強制労働に就かされた日本兵士。「アロン収容所」が知られる。

(7) この額は、米国政府が日系人を抑留した責任をとって支払った弁済金を基準にしている。政府が敵性を根拠に不当に人間を抑留し財産を奪った責任をとったモデルとして米国政府と日系人の関係が選択された。

(8) ティザリントンは、企業は日本軍政府の命令で捕虜使役をしたから、本来的には政府を訴えたいと述べた。英・米・豪・ニュージーランド元軍人・損害賠償請求訴訟（東京地裁）九四年提訴。戦時捕虜収容所における人権侵害、一人二万米ドルを請求。英・米・豪・ニュージーランド原告七名、収容所での過酷な労働・虐待などに対する損害賠償、一人二万二〇〇〇米ドルを請求。判時一六八五号三頁。判時一八〇二号七六頁。他。

- (9) 同時期から、日英豪米が、揃って、これまでの和解・相互理解活動を称揚し問題解決を強調、和解活動もイラクにおける共同戦線と関連する動きが目立ち始めた。POW研究会が豪日交流基金賞を受賞した翌週からイラク戦線においてオーストラリア軍が日本自衛隊を防御する共同演習が始まった。受賞には感謝しつつも研究会はこの動きには違和感を覚えた。また、メリンズ氏の肝いりで行われた日英和解礼拝は、英国軍の主要駐屯地サンダーランドで行われ、日本から駐在武官が参加した。「和解」は過去の軍の軋轢を解消し、現在の軍の協力関係に役立つものへと変質した部分がある。なお、マリンス・平久保氏の和解活動や恵子・ホームズ氏のツアーをめぐる複雑な感情は、二〇〇五年三月一六日付けのガーディアン紙の記事参照。
- (10) スリム会長との数度のインタビュのうち、第二回一九九七年。貴族院議院にて。
- (11) ティザリントン宅の面談、二〇〇〇年。
- (12) 典拠はあるが発言者との約束から記せない。
- (13) genuineは特に重要視される。
- (14) 小菅信子「戦後和解」(第三章、一五一頁)「統英軍捕虜たちの終わらない戦争——悪夢から和解に至る道」(「世界」一九九八年六月号)で成功が強調されている催しにおける一件である。
- (15) アーサー・ティザリントンの感慨は聴き取り・沼田氏とのやり取りは彼の収集した文書より。
- (16) 二〇〇四年九月一九日、リンリスゴウの自宅にて聴き取り。
- (17) 前掲書、科学研究費「報告書」に、アイリスの口述の書き起こし・DVDあり。捕虜の妻や未亡人は、捕虜の鬱屈や後遺症の看病などの影響から日本に対して負の感情が強く、捕虜以上に日本に厳しい事がまある。
- (18) エセックス大学政治学、労働党研究、ジョン・バートル助教授の見解より。
- (19) 乳房も露わな女性を第三ページに掲載する(サード・ページ・ガール)サン紙の内容は刺激的で議論は興味深いが、右派・低俗紙の位置づけは免れない。タイムズ紙と社主(マードック)は同一人物で、インテリはタイムズ、興味本位と階層低位者はサンと読者層を区分している。
- (20) 林駐英大使がラジオ出演して日本政府が謝った件への認知度を高めるなど、大使館は広報に努めた。
- (21) オランダは「日蘭架け橋計画」。なお平和友好交流計画に関するプロジェクト一覧表は http://www.muse-sk.org/blog/archives/2005/09/post_3.html、報告書は次を参照 <http://www.cas.go.jp/jp/shiyou/50412heiwa.pdf>
- (22) 捕虜の意見を記録した資料は少い。
- (23) 記念植樹・和解の石と捕虜の記念祭の距離に關しては、前掲「戦後和解」一六〇頁と、拙論「父の娘の戦争」「現代思想」(二〇〇四年)(八九頁)を比較参照のこと。本論は捕虜の娘に継承されるトラウマと娘の対応に関する考察。
- (24) 記念式典での会話記録のまとめ。
- (25) 捕虜の妻のトラウマに関する論文「失われた声をもとめて」(「現代思想」二〇〇二年)参照。ヒルダについて拙論「捕虜問題の比較文化的考察」(本誌第23、24、26号)にも触れている。
- (26) 「捕虜たちはなぜ(和解)に領けないか」(「現国捕虜・元抑留者問題における齟齬の構図」[「現代思想」青土社、(二〇〇一年一〇月)特集「和解の政治学」参照。経済と捕虜問題の関連については「ホモ・ホステイリスの悪循環」(同、二〇〇三年)参照。英国の最近の戦争記念式典に關しては「戦争の記憶」とオーラル・ヒストリー…
- 現状と課題 戦後60周年関係の英国の行事・会合の分析から」二〇〇六年、「日本オーラル・ヒストリー研究」第二号参照。
- (27) 調査時点で筆者は、向島の記念碑の話は伝え聞いていたが、このニックと同一人物とは知らずに聴いていた。
- (28) 恵子・ホームズ、<http://www.aggape.com>「AGAPE アガベ 心の癒しと和解の旅」いのちのことば社、二〇〇三年一〇月。二七―三〇四頁。向島の調査をした笹本妙子の文にドキュメンタリー工房制作の番組におけるニックの様子が引用されている。笹本妙子、取材協力・田村佳子「連合軍捕虜の墓碑銘」草の根出版会、二〇〇四年八月、三七―四〇頁。恵子・ホームズの和解への疑問は二四九―五一頁。同じく、高尾慶子「許すかNoか イギリス・ニッポン57年目の和解」展望社二〇〇三年一〇月、一〇七―一六頁。
- (29) 「二〇二枚の認識標」テレビ朝日、二〇〇二年。
- (30) ニックは来日後、その徴候をみせている。
- (31) 収容所関係者が後悔する人々として台座に立たされる事もある。シリングゴ少年抑留所の所長だった池上氏は「僕はさらしものにされました」と嘆いた。
- (32) この報告が一〇年遅れたのは、私が恵子・ホームズ、小菅信子両氏に対し、女性批判に気が進まず遠慮した故と、女性間の言説批評はジェンダーバイアス故に、男性間のそれと異なり、醜い争いと混同されがちだからだ。しかし捕虜も気が進まないのに覚悟をして私に言葉を託したからには、こうして伝える責任も発生する。また、今回概要をまとめる決意をしたのは、近年、捕虜の言い分と非常に食い違い実証性に乏しいと感じる和解言説が小菅氏の著作等で蔓延し、結局、現在の戦争を後押しする形で和解が利用される危機感の故だ。

捕虜問題をめぐる 日英「和解」の断層(中)

— 和解のシンボル、ジャック・カプランの遺言

中尾知代

はじめに

前編では、責任主体が消える現在の「和解」の状況を分析し、英国の厳しい実態について報告した。本編では、「日英和解のシンボル」として日本で知られる、天皇訪英時のデモで日本国旗を焼いた故・ジャック・カプラン氏(泰緬鉄道元捕虜)が筆者に託した「遺言」のオーラル・ヒストリーを公開する。

恵子・ホームズ氏「アガベ」主宰の和解旅行に参加したジャック・カプランは、多くの和解関係の書や外務省の報告書において、親日的に変貌したと強調される。ジャックが日本を好きになり、「完全に赦した」と述べたのは本当だ。だが、彼は帰英後も「日本政府からの公式の謝罪と補償を要請する」と明言し、日本市民の良さがわかったから、かえって日本政府の責任を確信したと言う。赦しても謝罪と補償は求める——日本人にはわかりにくい、この思考法(Reasoning)を分析し、捕虜の本音と日本の距離について改めて考察してみたい。

和解のアイコン 故ジャック・カプラン

ジャック・カプラン(二〇〇四年死亡)の名前が、メディアに出たのは、天皇訪英(一九九八年五月)時、パルマル通りで、バッキンガム宮殿に向かう天皇・女王両夫妻が馬車の目前で、日の丸の旗を焼いた事に始まる。

彼はカンタベリーのビルマスター支部を組織し、英国政府・ブレア政権や日本に抗議の手紙を出す抗議活動を続ける傍ら、リトアニアからのユダヤ系スコットランド人移民の出自と捕虜生活を綴った『ゴーパールの記録』(ゴーパールはスコットランドの東欧人ユダヤ人居住区)をまとめていた。

時の首相のトニー・ブレアが、経済振興のためにも捕虜問題を抑制し、天皇を歓迎しようという態度を示すことに彼は怒りを燃やし、ブレアに日本国旗を焼くと予告した。彼によれば「ブレアは警官を家に寄越し、何かを起せば逮捕する」と警告した。デモ当日、症状も悪化した心臓の波打つ鼓動を抑えながら妻クローディア手縫いの日の丸の旗に、彼は火をつけた。日本を好きになった今も、ブレアに抗議したこの行為を彼は後悔していないという。

筆者のジャック・カプラン氏のオーラル・ヒストリーは、デモ直後から、恵子・ホームズ氏主宰「アガベ」の旅で日本訪問後、八九歳で死ぬ直前まで数度にわたる。死ぬ半年前、筆者が英国で電話をすると「英国にいるのか?日本に行ったんだ、僕の命は長くない、自分でもわかる、僕の心臓はもう持たない、言っておきたいことがあるんだ。君は来て、僕の言葉を記録しなけりゃならない」You must come. 彼の言葉には有無を言わせぬものがあつた。

ジャックに対する英国内の反応

ジャックの振る舞いは、シンボリカルな行動を求めたメディア報道の格好的だった。極東捕虜連合が配布した「女王のゲストに失礼の無いように」との注意書きを気にしながら、元捕虜らは、ビルマ戦線退役軍人、サポーター、民間人抑留者たちと共に「戦場にかける橋」の主題曲をかすれた口笛で吹き、背を向けた。パルマル通りの長い沿道では、JLCSAのテイザリントン代表がジャック・エドワーズらと共に女王に抗議の書を宮殿に届ける方が注視され、ジャックの周囲に居た人間以外にさほど目立つ行為ではなかった。だがメディアを通して再生産され、国旗を焼いたジャックは、一躍注視を浴び、英雄視され、日本でも報道された。それは抗議の衝動のカタルシスであり、ひとつの頂点を形作った。

彼を応援する者たちは「よくやった」という趣旨のメッセージや、絵画、イラスト、詩を送り、新聞も競うように彼を掲載した。

礼節を守りつつ抗議せんとした元捕虜らは当然ながら反発した。アイリス・マガウランの言うように「抗議をする権利はあるが、やり方には節度がある」。ビルマ・スター協会（英国ビルマ戦線在郷軍人会）総統のスリム卿も、「愚かな振る舞いだ」と眉をしかめた。

ジャックは、タブロイド紙が募集した「日本に何か用事がある人を一人送るプラン」に

選ばれたが、「日本に無礼な行動を働いた人間を送るべからず」とスコットランド捕虜連盟代表してマガウランは抗議文を提出、新聞も人選を撤回した。

北海道田見野やデヴォリューション（各地域の独立議会）などスコットランド独立の気運の中で、イングランド侵略からの独立の象徴（青に白斜め十字の旗じるし）を彼らはこよなく大切にしている。日本を弁護したというより、旗そのものへの尊敬と崇敬を汚したことに對する怒りが、トムたちには大きかった（日本の国旗強制とは異なる）。リトアニア系移民であるジャックには旗への思い入れは少ない。（生粋）の英国人にとり、元捕虜全員の気持ちやユダヤ系移民に代表されることは本意ではないし、確かに英国らしい振る舞いとはいえないかったかもしれない。

抗議から和解のシンボル・平和のヒーローへの「転向」

ジャックがそもそも訪日を志したのは何故だったのか。

ジャックには疑問があった——「なぜ、日本人はあんなに残酷に、過酷に自分たちに振舞ったのか？」ジャックは最初の聞き取りで語った「私は元看守に平和と友好の雰囲気の中で会いたいのだ——なぜ、君たちは僕たちをあんなに殴ったのだ？何を考えていたんだい？君たちはまるで催眠術にかかったかのよう、僕たちを殴っていた。可哀相と思わな

かったのかな？」。その後、高尾慶子・恵子ホームズらの訪問を受け日本行きを奨められ、二〇〇二年のアガベの旅行に参加した。歓待を受け、着物ショーなど日本の接待を大いに気に入り、初めて日本人の人々と「人間」として出合い、元連合軍通訳永瀬隆氏と意気投合した様子は、少々の編集はあるが、高尾、ホームズの著にあるとおりだ。

だが、小菅信子著『戦後和解』や折田大使の報告書にジャックの訪日が天皇への抗議デモ参加者全体の、日本への憎悪や怒りを相殺したかのような表現があるがそれは事実と次の点で異なる。第一に、数千名にわたる捕虜生存者・デモ参加者のたった一人が親日派に転向したとて残る人間全員が納得したわけではない。親日的な捕虜を元に英国の敵意全体が溶解したような表現は、学問的にも真実でない上に誤解を招く。第二に、彼は、「アガベ」旅を終えて親日的になって帰英してから、も、「アポロジー」と補償を諦めず。逆に、日本人が良い人である確信からなお一層、責任の所在は政府にあると確信したのだ。

ジャックの「遺言」——最後のメッセージ

ジャックは、自分が和解のシンボルにされかけていることにも意識的で、それが招く危険にも意識的だった。以下に記す彼の最後の見解は、記録されねばならず、彼は筆者を自宅に緊急に招いたわけだ。「僕の心臓はいつ

止まるかわからない、明日にでも目を覚まさないかもしれない。そう見えないうら、でもここにいるクロード・ディアは知っているよ」「僕は嘘は嫌いだ、いいかい、僕は死ぬんだよ、なぜ嘘を言わないといけない？僕が言っているのは本当のことばかりだ」——死期が近づくとより一層、人は遠慮なく本当のことを話すようになるとポール・トムソンは言うが、まさにそのとおりの雰囲気だった。彼は死ぬ直前の遺言を「オーラル・ヒストリー」として筆者にビデオ録画させた。まさにその半年後に彼が死ぬとは思えない程、彼は生き生きしていた。日本に行った後の興奮もさめやらず、（今考えれば死を直前にした一種の晴れやかさもある）自分の考えをまとめ、話そうと必死だった。

ジャックの長い話の中で、今回の論稿に関連し、かつ彼が最も強調した三点は次のとおりだ。曰く(1)「日本人に対する認識が全く変わった」(2)「日本人を好きになったから、日本政府も自分の主張を受け入れ、アポロジーと補償金を与えるべきだ」(3)「英国政府が払った恩賜金は日本政府の責任を放棄しない」。以下、順次、彼の言葉を見るときしよう。

(1) 記憶の置き換えと、親日化

先回の論文で、日本訪問の「癒しの効果がある」ことには簡単に触れたが、ジャックの場合がまさに、対日意識が転換した例だ。日本人の好意との「邂逅」が捕虜が日本に対し

て抱くネガティブな思いをポジティブに換える如実な例である。当然ながら、泰緬鉄道でネガティブな日本人にしか会っていない人間が、突如、短期間に多量の日本人に無条件で歓迎されるのは衝撃である。彼に、たとえば小林よしのりの見解や教科書を作る会の話をする人、日本人の大半が今も捕虜の苦悩などを知らない事、英国と戦争した事など忘れていた事など、伝える人間は誰一人おらず、言うまでもなく英国植民地の責任を問う声も無い。そういう一種の囲い・閉鎖空間から元捕虜は日本を見聞する。

美しい山と海、慰霊碑訪問、豪華なホテル、心地よい宿、英国好きな人々（案内状には「英国の貴婦人や紳士と交流しませんか」と銘打たれていたこともあった。来るのは上流階級ではないため、皮肉といえは皮肉である）英国風庭園、外務省参加の晴れがましいパーティ、歓待、拍手、歌、ホームステイの暖かい家庭のもとでなし、赦しを請われること、かわいらしい女性たち、ユダヤ人・移民・中流階級下位だからといって、差別をしない人々、そして捕虜経験を熱心に学ぼうとする市民たち——それは、一部の捕虜にこびりついて離れないネガティブな日本の記憶と、ポジティブな日本の記憶の総入れ替えⅡ置換を起こさせる。ここまで歓迎されると逆にネガティブな気持ちを持つこと自体が難しくなり、意図せずともこれは心理療法的な心理操作でもある。

以下は、彼の聴き取りの最後の部分から、

関連場所ごとに整理した口述記録である。まず彼が強調したのは親日的態度への変化だ。とりわけ、移民の子供として小学校を出てすぐ働きに出た彼、節約に節約を重ねて生きてきた彼が、日本人の留学や経済格差について抱く気持ちがよくわかる。

中尾：日本にあって、それほどたくさんすばらしい人々に会って、そしてたぶん多くの人々に赦しを求められて、今どうお感じですか？

ジャック：そう、もう言ったとおりだよ。僕の日本人に対する感情は完全に溶けた。言っただろう、私の認識を完璧に革命的に変えたよ。僕は——そう、こういう風になるとわかるかな。日本に行く前の僕は——カンタベリーにはすごくたくさん日本人が住んでいる、カレッジがあるし、二軒先には日本人学生が住んでいるよ。毎日ああいう若者がカレッジに出かけるところを見ると、僕は日本に行く前は思ったもんさ。『豚どもめ！お前の父親や祖父は俺を酷い目に合わせたよ。この国にお前は来て教育を受けて、学位（資格）をとって日本に帰っていい仕事に就くんだよな。自分の英語を完全にするためにこの国に来たんだろう。』それで思うんだ、『この腐れがが！で前らが本当はどんなもんかふさわしいか、俺は知っているよ』僕は直接は何もしなか

ったがね、怒りを感じた。怒りを感じたね、日本に行くまではな。

上記に続けてジャック・カプランは「完全に日本を赦した」ともいう。だが「良い日本人」を知り赦したことにより、アポロジーと補償要請を引込めたわけでは無い事を強調する。

(2) 日本人は好きだ『しかし』——

英国の恩賞金は日本を免罪しない

中：チャールズ・ピオールさんは(同じ旅行に行った元泰緬鉄道捕虜、元ビルマスタ―報道官、長年、恵子・ホームズ氏と赦しについて論議を交わす。親目的になったが赦すべきか旅行後悩んでいた)彼は日本にいてとても幸せだった、けどまだ正式なアポロジーを日本政府から求めるって言っていました。

ジ：その事について言ってくれてありがたい、そう、それが今は唯一の相違だからね。僕は親日だ、しかし——『しかし (but)』があるんだ。ただひとつの『しかし』がね。知つてのとおり、もちろん、英国政府は捕虜一人ひとりに去年、一万ポンドを支払った。

中：恩賞金ですね。

ジ：恩賞金の支払い、その通り。いいかい、この恩賞金は日本政府を責任から放免 (absolve) するものではないんだよ。だからこの点を強調しておきたいんだ。人

はいうさ「ああ、ジャックね、やつはすつかり、親日本人だね、やつらのケツの穴でも舐めるね (kiss their backsides, kiss the asshole と同じ、奴隷のように言うことをきく、なんでもするの意)」いいや違うさ——まだそこにはこの『しかし』があるんだ。……「その『しかし』はこういうことなんだ。英国政府が僕のキャンペーンのお陰で一万ポンド払った事実によって——あれは僕がさせたんだよ——日本政府の責任が免罪される訳じゃない。僕らを動物のように扱ったのは日本政府で、彼らはヒロヒトの責任があるんだよ。彼の息子のアキヒトだね、もちろん、アキヒトが今は権力はないというだろうね、そうかもしれない。彼はもちろん、父親が持っていた権力は持つてないんだろう、それはそうだろう。しかし、そうは言っても、今日の日本政府はヒロヒトが僕らにしたことに対して、日本政府の名においてなされた残酷さにたいする債務的責任 (liability) と責任 (responsibility) を受け入れないといけない。この論理性は受け入れるだろう？ そんなに無茶な事を求めているわけじゃないよ。

(3) アポロジーと補償の要請は続く

中：つまり、まだ、ある種のアポロジーを日本政府から求めている、ということです

か？

ジ：そうだ。僕は二つのことを求める。アポロジー、公式なアポロジーと、そして、ある程度の額の支払いだ。

中：まだそれを願っているんですか？ というのは、日本政府は、あなたのそういう思いを変えてほしかったんだと思いますが。私が理解している限り、旅行の目的は(そういうことに対する)貴方の態度を完全に変えてしまうというよう……。

ジ：目的は……君が証人だ、旅は僕の態度を変えたよ。僕のもらった手紙をみてごらん、日本中から手紙が来るよ、僕はとっても幸せだ。クリスマスカードを三四枚もらったよ、新年のお祝いとクリスマスと、それに一人の女性は長い手紙さえ書いてくれたよ。ほんとちよつと馬鹿だよ、もうおじいちゃんになっていい年なのに！でも一人の女の子は言ってくれたんだよ……一五歳でね、「ジャッキさん、私は自分のお爺ちゃんを知らないんです。私のお爺ちゃんになつてくれますか？」なんとも光栄だね。光栄だよ。ケイコホームズでさえ言ったよ、「ジャッキさん、貴方のような父親がいたらと思うわ」ほらここの記録にみな書いてあるよ、僕はこれをとつても誇りに思っているんだ。

この時点で筆者はやや混乱した。謝罪と補

償が必要と言いつつ、旅のことになると思はれ、切ったように、日本人々との交流の嬉しさを語るジャックが本当に言いたいのは何か？ 親日派 (pro-Japan) になった彼と、補償や謝罪の要請の関連性はどこにあるのか？

日本の和解活動家や研究者、外務省や大使館も「捕虜が日本を好きになる」¹⁰「日本を赦す」¹¹「対日補償や謝罪を求めなくなる」という図式で理解している。筆者は、以前、和解には、情緒的和解(赦せる)・理性的和解(理由がわかる)・経済的和解(補償を得る)の三つの位相があると定義したが、日本式では「情緒的和解」が達成されれば「経済的和解」要請は消えると思うのが一般的理解だ。だが「ジャッキさん」は違う——西洋のロジックとユダヤのロジックの組み合わせに日本式の「情緒的和解」の論理が跳ね返される瞬間が次の口述だ。

中：しかし、それでも (even so) まだ貴方はアポロジと補償を求めている、それが重要なんですか、それとも重要じゃないと？

ジ：そう、君は「それでも」と言ったね、僕は「真実の声明(陳述 true statement)」をもうすでに述べた。僕は日本政府に同じような作法で報いてほしい (reciprocate in the same manner) 僕を僕自身、ありのまま受け入れるように、とね。

つまりジャックの主張は「自身は日本をありのままに受け入れたのだから、彼自身の要請——謝罪と補償——を、日本政府はありのままに受け入れ、与えてほしい」ということなのだ。日本を赦し受け入れたのだから、日本政府側も彼の要請を理解し受け入れるべきだ、という互恵性の理論なのだ。

ジャックも、拙論(上)で記したニック・カーターに似た批判を浴びた、だが彼はニック以上に「転向」(日本憎悪の象徴から友好の象徴へ)したにも関わらず、肝心な(そして日本政府にとっては最も重要な)点では「転向」していないためそれ以上の批判は免れている。

ジ：いいかい、僕はこれから言うことは君は信じがたいと思うかもしれないけれど。少しは、僕が親日になった事で僕を軽蔑するやつらがいるんだ。だから僕は言った。「なんでだい？僕の心に正直にしただけだよ。僕はかれら(日本人)に会ったよ、君らは日本人に会ってないじゃないか」。彼らは言ったね。「でもジャック、それは君の原則に反するじゃないか」。

僕は言った。「いいや、そんなことはないよ」。すると彼らは言った。「たぶん、もう君は日本政府が僕らに(補償金を)払うべきだと思わないんだろう」。僕は言ったね。「それは違うよ。それがこの『しかし』なんだ。日本の人が今や僕の友達だというのは認めるよ」。

——この『しかし』は、日本と友好的になり、日本人が良い人だと認めるが、英国政府の恩賞金は日本を免罪しない、という点と、日本にはいまだ公式の謝罪と補償を求め続けるという姿勢をさすわけだ。

(4) 政治家の責任と「戦争の責任」

ジャックが日本人を敵とは思わなくなった理由は、ほかに二つある。それは、相手も人間であり、故に殺しあう必用など無かった、という、日本にもある「戦争自体が悪い」という説と永瀬隆との出会いだ。日本との明白な相違点は、ジャックは「普通の人は悪くない、だからあくまでも政府に責任がある」と考える点だ。英国の場合、人民が選ぶ政治家の判断は結局自分の責任でもある。だが、同時に、政治家は自分たちの税金で雇っている人間で自分たちの意志と利益を代表する責任がある。その面において、正しい政治家と、彼らが軽侮のニュアンスを込めて呼ぶ「politician」(政治屋)は異なる。日本の魔力にかかったか、と問うローカル新聞記者に彼は「自分たちにも罪はある」といい、

戦争が君に敵であり自分の敵なんだよ。どうして他人が違う軍服を着てるからって、そいつを殺さないといけないのかい？どうして僕は——どうして僕が彼を殺したり、彼が僕を殺さないといけないんだい？僕のせいじゃない、彼のせいじゃない。

やない、政府のせいなんだよ、政治屋たち (politicians) のせいなんだ。」だから僕は戦争は政治屋のせいだとして責めるね。あいつらが引きずり出されて撃ち殺されるべしよ。どんなやつでも他のやつに戦争をしかける者は野原に相手国の政治屋と一緒に出て行って喧嘩でもするがいいよ。どうして僕が何の敵意も無い人間を殺さなくちゃならない？ 僕が大好きになれるかもしれない人間をだよ。その母親が彼を待っているだろう、僕の母親も僕を待っている。僕は戦争の頃結婚してなかったからね、いまだったら、この奥さんのもとに戻ってくるだろう。

永瀬氏との邂逅

このような意見を持ち、ブレア（と女王）に強い憤りを覚える彼、為政者にはつきりと責任の落とし前を要求するジャックが、天皇と上官の戦争責任を厳しく問う永瀬氏と意気投合したのは自然の理だった。

ジ：彼はいい人だね、僕は自分の兄弟みたいが好きだよ。僕にほんとうによくしてくれてね、親切にしてくれて、医者もね——ホテルで食事や飲み物を丸一日奢ってくれた。二つテレビを買ったんだ。僕は兄弟みたいだったね、抱き合ってたよ。（頼に）接吻したよ。

捕虜を殴った当事者ではない通訳だった永瀬、終戦直後の捕虜の遺体処理で強い衝撃を受けた永瀬は、戦後一人で、日本の側の「謝罪」「すまない気持ち」「ごんげ」を代表してきた。永瀬は戦前に天皇への信頼度が高かっただけに、逆に現在に至るまで、軍事の大元帥だった「昭和天皇」に責任を問う気持ちは非常に強い。ブレアと王室に不満を持つジャックが永瀬と対面すれば、為政者にすべて責任がある点で一致するのは予定調和だ。

ジャックが本当に会いたく、会うべきであったのは、「当時、彼を殴っていた人々」、鉄道隊か、泰緬鉄道捕虜収容所の元看守だったろう。たとえ、その相手が「自分は悪かった」とは一切思わないタイプであっても——もともとのジャックの関心・望みは、殴る時の相手の気持ちだったのだ。その点で、永瀬隆との対面は、「日本側の良心の通訳」役を担う人物との対面だが、ジャックが望んだ「当事者」との再会ではない。

捕虜を殴打したことさえ否定したり、あるいは殴打の必要性を肯定する人に会えばジャックはどうなっただろう。傷つくかも知れないが、彼の好奇心と知的関心は満たされただろう。ジャックが私に最初に問うた疑問——「日本人看守は自分たちを殴るとき、どう思っていたのか」は、結局は残されたままで。

そもそも、ジャックを永瀬と引き合わせる事を考えたのは、高尾慶子（「許すかNOか」著者）だ。外務省批判の強い高尾氏の目的と

はあわないかもしれないが、日本の折田大使との交流を喜ぶ。

ジ：僕が今誰と友達か知っているかい？ ミスター・オリタだよ、ロンドンの日本の大使だよ。二通手紙を持っているよ、もし見たければ二階にあるよ、とても素敵な手紙だよ、なぜならね、リトアニアにいた日本の男性が、リトアニアの日本の外交官（注：杉原地敏）だったんだが、ヴェルナスというところで、ユダヤ人にビザを与えた事を僕は発見したんだ——そう、僕はそれを聞いた時、本当にうれしかったね。それで日本大使館はそれを知っていて、折田大使と僕は文通をして、彼が思うに——彼は本当に素敵なやつだね、僕は誇らしいんだけど、彼も僕を素敵なやつだと思ってしてくれる。僕らはとても良い友達なんだ。日本の大使館に晩餐にいつてきたよ。

折田駐英大使（当時）との交流を、ジャックは確かに誇りに思っていた。彼の葬列に折田大使夫人が参列したことを妻クローディアは感謝している。大使という「高次の階級」との交流は、とりわけ、英国の場合階級意識とからんで和解に作用する。

高尾慶子は、その著『許すかNOか』の中で、〈朝日新聞がジャックの国旗を焼いた怒りを正当化するだけで〉（リトアニアのユダ

ヤ人を救ったような素晴らしい杉原地畝のような人のことを知らせていない」と憤り、ジャックに杉原地畝の存在を知らせることが、彼の傷ついた気持ちを癒す契機になればと思つたと記す。ユダヤ人を救う結果になつた杉原の仕事を知るのは、ジャックの彼の日本への理解度や日本人の誠意（あるいは場合によっては権威にも逆らう可能性を知る事には役立つ）。

だが元捕虜のユダヤ系列という属性を慰めたから、彼が英国人捕虜として過酷な扱いを受けた事がキャンセルされるわけではない。外務省に造反した人を英雄とたたえることで、それまでの外務省や日本政府のミステークが相殺されるとしたら矛盾だろう。「一部には良心的な日本人もいました」ということで落ちをつける、戦争全体の問題が未整理のまま残ることにもなる。

信仰

最後に、「日本が溶かしたジャックの心」とアガベなどでは銘打たれているが、次の彼の言葉も、彼が残した遺言の中では大事だろうと思うので、記しておく。「僕は神を信じていない。僕は不可知論者なんだ。僕は神を信じないけれど、でもそれでも——まあまあいい人間だよ。自分がいい人間だということを実証するのに教会に行く必要はないよ。もし神がいるってんなら神は僕がいい人間だつて知っているよ。わかるかい？——だから僕

は神にもの申しに教会に行く必要はない、神はジャック・カプランがいいやつだつて知っているよ——ね、わかるかい、僕の年になるとね。嘘をつこうなんて思わなくなるんだよ」彼は筆者に最後にこれらの言葉を残し「さあ、これで君はwhole truthを告げたよ」と笑い、あの世に旅立った。大変な言葉を託されたと思つた筆者は、彼が誤解されないコンテンツを考えるうちに、和解本が続々と出版され、彼をシンボル化し始めたのだった。ここに彼の残した遺言を記すことができて、そして、彼が（日本政府や和解活動家・和解宣伝家が信じてり広めたようには）日本の謝罪と補償要請をやめた訳ではないこと、日本とは異なるロジックで彼が日本を好きであることを伝え得て、安堵している。

表象されるジャック・カプラン

恵子・ホームズ氏の著作の中では、彼は日本から大喜びで帰り、日本に対して好意的なコメントをたくさん発表した様子が神の御業と讃えられている。「まるでジャックは人が変わったかのように、日本人を称える返答をしているのです。……今では昔の仲間たちに恨まれているのではないかと思うほどに、「心の癒しと和解の旅」に参加した後、ジャックは変わりました。もちろん、ジャックと一緒にこの旅に参加した一人ひとりがそれぞれに素晴らしい経験をし、癒され、素晴らしい変化を見せています。それは、多くの日本

人が、心を合わせて真心から大切なお客さんをもてなしたからです。そして神様がそんな私たちの中で働いてくれたからです……」。そして地方紙のインタビューからは、上記の（まだ補償を求める）くだりではなく、次の箇所だけが掲載されている。「ジャックは多くの地方新聞のインタビューにこう答えています。「日本人は親切で誠実だった。私は日本人を赦した。長い間、日本人を憎んでいたが、今はもう日本人への恨みを墓場持っていかななくていい。実に心が軽くなったよ。今では、私には日本人の親友が何人もいます」。

高尾慶子氏の著には、彼が旅行から帰った後に、地方紙のインタビューを見て（英国人も謝罪や補償賠償行為に飽き飽きして日本を好意的に見たいのではないか）と思つたというくだりと共に、訪日直後のジャック・カプランが、恵子・ホームズ氏の福音主義キリスト教の強い伝道には辟易し、猜疑心も持ったことを伝えている。——だが、その時点で彼はまだ、上記の遺言の要点三つは伝えていない。平和の英雄扱いされるうちに、言い残しておくべき事が明確になったとき、たまたま長年の知り合いの筆者が彼に電話をしたのだろう。そして、「声と顔を記録しておく」手法も、また、彼にとり、その際、本当に大切なものだった（新聞の取材を幾たびも受けていれば、適宜ストーリーを作られたり言葉が編集されることは経験上わかっていたはずである）。

小菅信子はその『戦後和解』でこれらの本

と新聞を元に「抗議デモはあったが」としてジャック・カプランが日本国旗を焼いた事件に触れた後、「だが、この元捕虜ジャック・カプランは、泰緬鉄道での慰霊を中心に日英和解に尽力してきた永瀬隆、恵子・ホームズらとの出会いを通して、のちに日本を訪問し、日本人と〈再会〉することになる。」——と、

あたかも、この抗議デモが、ジャックが和解の担い手に会った事で解決したような印象を与える描き方をしているのは、不思議なことである。小菅が、天皇訪英デモ当時はすでに帰日して現場に不在であったため、新聞や他の著書から再構築せざるを得なかったとはいえ、小菅自身が参考文献にあげる高尾の著書には、ジャックが抱いたキリスト教的和解や恵子・ホームズに対する疑念はすでに明確に描出されている。ホームズの著者は「アガベ」の成功証明と伝道が目的で、伝道を本旨とする出版社から出ており、一種の美談的展開になるのも詮無いことかもしれない。だが、すでに幾多の論文・著述で恵子・ホームズ氏の活動への疑問が提示された段階で、英国の和解活動実践の中でホームズ氏のポジシヨンの複雑さも知るはずの小菅信子が、学問的調査研究の成果物たる著書の中で、一方的に恵子・ホームズ氏の成功を讃え、ジャックの疑念は省略し、ジャックの考えも実証・確認しないままに、「和解の成功」だけを、抽出し強調しているのは、いかなる理由と方法

論によるものなのだろうか？

以上、日本側がよく展開する二項対立的図式、すなわち〈親日⇨謝罪と補償を要請しない〉、〈反日⇨謝罪と補償要請〉、という単純さが、英国とは異なること、そして、捕虜の気持ちの複雑さは一定程度、示した。

ともあれ、このままでは、ジャックは、和解のアイコンとして、日本国内向けの対日プロパガンダに使われているのも同然である。次稿では、英国の捕虜感情の実態と、日本に届けられる「和解美談」のギャップを産み出すニュース・ソースも含めた和解の力学と政治学の構造について改めて見直し、また、日本が現段階で素直にはアポロジイを出せない状況について考察したい。

(なかお・ともよ／岡山大学大学院准教授)

※なお、本稿内における、ジャック・カプランおよび恵子・ホームズに関して論じた種々の著書・論文に関しては、以下のそれぞれの頁を参照していただきたい。

中尾知代 後掲論文および「失われた声をもとめて」〔現代思想〕特集 フェミニズムは終わらない(二〇〇一年五月号) 一四四―一六七頁。

恵子・ホームズ「アガベ 心の癒しと和解の旅」いのちのことは社、二〇〇三年一〇月、二五五―二七〇頁。

高尾慶子「許すかNOか イギリス・ニッポン57年目の和解」展望社、二〇〇三年一〇月、一〇七―一一六頁。

笹本妙子『連合軍捕虜の墓碑銘』(取材協力・田村佳子)草の根出版会、二〇〇四年八月、二四九―五

一頁。

小菅信子『戦後和解』中公新書、中央公論社、二〇〇五年七月。特に一三〇頁以後、一五六―一五八頁(科学研究費補助金基盤研究C二)、山梨学院研究助成金の成果の一部。

中尾知代「日本軍に抑留された連労軍捕虜とその家族のオーラル・ヒストリー 戦争の記憶に基づく日本イメージ形成…ジェンダー変数による分析」特に「第七章 和解活動・〈謝罪〉への反応と日本観」ジャック・カプランの本稿の口述箇所は「付属資料DVD3の1」所収。(平成一八年一月、科学研究費補助金C二「研究成果報告書、改訂版、岡山大学蔵」) 捕虜・捕虜関係者に関する引用はすべて筆者のオーラル・ヒストリー調査および文献調査の照合に基づく。映像引用・確認・借り出しが必要な場合、中尾知代 traka@ccokayama.ac.jp に連絡されたい。

(1) パルマル(ポールモル)通り・ロンドン英陸軍省の建造物沿いの大通り。パッキングラム宮殿に通じる。

(2) 国旗を焼いた模様については、たまたま、その目前にいた高尾恵子が報告している。

筆者の友人も目撃し、非常な衝撃を受けた。デモ当日のファイルワーク報告は、ほかに拙稿「捕虜たちはなぜ〈和解〉に領けないか…英国捕虜・元抑留者問題における齟齬の構図」〔現代思想(特集 和解の政治学)〕青土社、二〇〇〇年一〇月号。

(3) 民間人抑留者は「あなた(天皇)の手は血に染まっている」という意味の、赤い手袋をつけた。

(4) ジャック・カプランが英国全土で報道された新聞のコレクションはカプラン宅および中尾蔵。

(5) 抗議デモ直後の、スリム卿の聞き取りより。(49頁へ続く)

(89頁より続く)

デモ直後は、焼いた旗は街路に飾った日英国旗で、誰が焼くか捕虜が勇気を競い合った等の伝説も流れた。

(6) トム・マガウランの新聞に対する抗議のプロセスは、本人との手紙のやり取りと、妻アイリスのオールナル・ヒストリーより要約。

(7) ジャック・カプランに対する最初の聴き取りより。

(8) 日本政府に抗議活動を続けてきた捕虜は、テイザリントンをはじめ、各自の行為が恩賞金配布に効果があったと自負している。メリンズが署名を集めたのは、「最後にその動きに乗っただけ」とテイザリントンは言う。

(9) 本誌前号の拙稿(上)三四〜四五頁で紹介した、英国での「謝罪とお詫び」の論議から、本稿では主として、「アポロジー」という単語を使用する。

(10) 和解の三つの定義に関しては、「捕虜はなぜ〈和解〉に領けないか」一六一頁参照。

(11) 和解と、英国階級社会の力学の関係については前掲「捕虜たちはなぜ〈和解〉に領けないか…英国捕虜・元抑留者問題における齟齬の構図」一五二〜三頁参照。

捕虜問題をめぐる 日英「和解」の断層(下)

— 「和解成功」言説とはなんだったのか

中尾知代

はじめに

拙論(上)(中)では「日英捕虜問題の和解は成功している」という、日本で確定されつつある言説と、元捕虜の実態の食い違いを整理した。本編では、「和解成功」言説が流布した背景にある、政府や行政・外務省側の関与と、それに応ずる学説を展開した学者らの関係、すなわちアカデミック・コントロールの力学について考察する。アカデミック・コントロールはここでは〈学問による統制〉と〈学問に対する統制〉の両義的な意味で用いる。つまり、行政側が「学者」「学問」という仲介者を通して、人民に情報を制御し、自らの指針に沿う政策実行に対して有効な結論を出すよう、また、政策実行に邪魔にならぬように学問成果のまともに容喙することをさす。このアカデミック・コントロールに従順な学者は最近増加し、国策に影響を及ぼしている。本来、行政・政策に対し距離を置いた観点から冷静に批評し、政府の平衡を保つ機能を果たすべきアカデミックが、戦前の御用学者や御用メディア状態に陥り、国民はその状況に無防備に曝されている。演出された「日英和解」の分析を契機に、私たちはこの状況を知る必要がある。

最近「和解」問題のコメンテーターとして登場が目立つ小菅信子氏の報告は、常に国策がいかに成功したかという情報に集中し、その影にある元捕虜の不满や鬱屈を語り消す。

これを大使館が歓迎しないはずもない。両者の密接な関係と、小菅氏側の大使館への過剰適応は、元捕虜のトラウマや怒りを存続させ、かれらの感情と日本の大衆の認識の間に、大きな溝を作ったのみならず、全体として今後の外交政策を誤導する情報源となつている(以下、文中では敬称を略する)。

一、「戦後和解」成功言説

拙論(中)の最後で、「和解」を巡る現象を整理した際、筆者は、小菅信子が自著や論文でなぜ成功談のみを抽出し強調するのか、その理由と調査方法を問題視した。彼女の日本における報告と英国の実態には大きなギャップが存在するからだ。拙論ですでに挙げた点を幾つか再録する。

恵子・ホームズの和解活動の限界や難点にかんしては、すでに元捕虜や日英の民間和解活動家は知悉しており、小菅自身も論文で捕虜の不满を一部記している。だが、読者の多い『世界』の二編の報告文(一九九七、九八)や中公新書『戦後和解』(二〇〇五)では、小菅は、ホームズを「元捕虜や遺族から絶大な信頼を得ている熱心なクリスチャン」で、「魂の傷——日本への憎悪——を癒す」人物として、努力と成功面だけを褒め称える。

一九九八年の天皇訪英時の抗議デモにしても、永瀬隆とカプランの交流の一部だけを孫引きし、彼の訪日が英国全土の新聞に報道された事を伝え、元捕虜らの不服が緩和された

かのような印象を形作る。だが拙論(中)で示したように、ジャックは肝心な点の見解は変えなかった。帰国後、「日本人は良い人だとわかったが、補償と謝罪に関してはステイタス・クオ(現状維持)」とユダヤ系英国人の新聞にも明記している。もし新聞資料を収集し検討したなら容易に気づく点である。

また、小菅の著作には、在英日本大使館員の達成面を強調・賛美する傾向が顕著だ。たとえば、『世界』の論文「英軍捕虜たちの終わらない戦争」(一九九八年五月)では、九八年の沼田貞明全権公使(前)の大使館での歓送会に百名を超える捕虜関係者が集まり、日本を相手取り訴訟中の団体「日本強制労働生存者協会」(当時関係者約二万五〇〇〇名)会長ティザリントンが訪れたこと、沼田公使のスピーチに続き大使館作成のビデオ「戦争の記憶と友情、和解への道程」上映など、盛会ぶりや沼田公使を捕虜らが熱心に取り囲む交流の様子を描く。

だが、このビデオにティザリントンが愕然とし「おべっか使(sycophant)！」と怒り、「人生最悪の経験だ」と沼田公使に告げ席を立った事は記されない。小菅がその様子を目撃してないにしても、ティザリントンはこの見解を事あるごとに話したし、筆者もこの件を二〇〇〇年に拙論で公表しており、実態確認は可能だったはずだ。だが二〇〇五年夏出版の小菅信子著『戦後和解』でも、ティザリントン参加の点だけが再録され、大使館

の和解政策が補償要請派を魅了した印象を与え「募集もしていないのに百名もの捕虜が集まった」と感動的に記している。だが、実際には、恵子・ホームズの旅行に参加した元捕虜夫妻、BCFGのメンバー、研究者や抗議活動をする元捕虜や民間人抑留者に招待状は送られた。ティザリントンは「招待状」に

「和解と友情のために」と記されていたが、抗議の対象は日本政府で、日本人とは既に友人だからこの呼びかけ文は不適切、と異議を唱えたほどである。捕虜や民間人抑留者の婦人は単純に和解のためでなく、日本大使や沼田公使に直談判をするために参加したのだ。ちなみにこの「百名参加の成功」は直後に大使館のHPにも掲載されたが、参加した英国人学者や捕虜からクレームが出た。彼らは和解成功のプロバガンダと感じ、大使館にとってもよくないとした。

小菅は『世界』続編で「英国王立退役軍人会」会長グレアム・ダウニングのパーティ参加や日本訪問を喜ばしい知らせとして描いている。だが、ダウニングがその後、親目的にすぎるとして、会長の座を追われた事(日本と交流をもつ元捕虜たちが自国で憂き目にあうお馴染みの構図である)は記さない。『世界』続編(九八年)や『戦後和解』では、ケンブリッジの元捕虜デイが大使と親しく交流し感激した様子が語られるが、激しく怒り、許さないと声明した捕虜のことは描かない。要約すれば、小菅論文・著作では、ごく一部の元

捕虜のサンプルがあたかも母集団全体を代表しているかのように描き、証明の手続き抜きで全体を「成功」に一元化するという手法が顕著だ。この事実にはロマン主義的な筆致のせいで読者は気付きにくく、通常ならば反証する手段も持たない。

選択的な「和解」報告

小菅氏の「和解の成功」説は限定した調査と限られたインフォーマントの情報に依る印象や伝聞が多い。元捕虜の現場・状況の学術的実証やフィールドワーク不足に加え、文書資料も、日本とは異なる特質をもつ問題の多い英国の新聞メディアや国会の議事録を史料批判無しに用いる上、外務省賛美の傾向が強く、それらが記述が偏る要因と考えられる。

そもそも、小菅の英国滞在は一九九六年四月〜九八年三月で、戦後五〇周年の苛烈なVJデイの騒動(九五年夏)や、九八五月の天皇訪英時の過熱の場にいなかったのも原因だろう。英国滞在中のフィールドワークもケンブリッジが多くを占める。間隙を埋めるインフォーマントは、日本政府が認め援助した和解活動家で占められる。ビルマ戦線日英同士会(BCFG)平久保正男ら、「和解と国際友情トラスト」会長のフィリップ・マリンズ(このトラストは、マリンズ・故ゴードン・グレアムの二名と日本側協力者の小菅の三者の団体)、フィリダ・パーヴィス(元大和日英基金マネージャー、現在はジャパニク代

表、夫君は「ジャパン2001」を指揮した功績で叙勲され、天皇の親族と現在親しい)、在英日本大使館の人間が主だ。日本に反発する元捕虜の反応や声を収集したり記録した様子は、論文や調査報告、科学研究費成果報告書からは殆ど伺えず、英国の数々の「和解」関係の礼拝や催しへの参加も実際は少ない。

小菅の書き方——自分の見聞を適宜編集し「和解がうまく行った側面」のみを抽出し、捕虜らの厳しいリアクションを省略する——のせいで、捕虜問題の基本的状況である英国の厳しさが伝わらず、情緒的な和解で問題が解決したかのような印象に読者を誤導している³。本来は、このような厳しい土壌(コンテキスト)を描いて初めて、現在の「和解」の稀な成功部分の価値も明らかになるはずなのだが。

サンのお詫びの効果称揚の根拠は？

サン紙の「お詫び」成果報告も同様だ。『世界』報告文と『戦後和解』において、小菅は、ブレア首相と日本の交渉により、極東捕虜連合が、「サン紙」へのオウビ掲載と引き換えにデモや補償を控える決定を下したとする。

個々の(対話)の実践という最も地道な民間のストラテジーが、政府によって再評価され実践されつつあることの意味は大きい。それはとりもなおさず「補償金がほしいというより日本政府のリコグ

ニシオンを求める」といった元捕虜の訴えに応えるものとなるからだ(略)この直接対話外交の最大の成果は、橋本首相による英タブロイド紙『サン』への投書である(略)『サン』への橋本首相は：すくなくとも「譲歩」のきつかけにはなつた。：「極東捕虜協会」は日本に対して補償を要求しない、天皇訪英にあたって抗議活動をしない、天皇の公式謝罪を求める、の三点を統一見解として英外務省に伝えた。：直接英大衆にインパクトを与えたという点できわめて効果的であったいっぽう、橋本謝罪は問題を「天皇による謝罪」に収斂させた。(『世界』一九九八年六月号、新書『戦後和解』にもほぼ同様の記述あり)

本文は九八年一月サン紙にお詫び掲載と三月の小菅の帰日後から、五月の天皇訪問時の間に執筆されているため、デモにおける捕虜の怒りの様子は皆無だが、それ以外にも疑問点が多い。「サン紙掲載のお詫び」に対する捕虜・家族の拒否反応は拙論(上)に記したが、サン紙掲載当時の元捕虜の反応は複雑で、怒り、当惑、無反応、呆れ、驚きが強かった。当時滞英した中原道子も周囲の「元捕虜の反応は、好意的というよりは、むしろ、きわめて冷たかった」と同じ『世界』の六月号に記している。スコットランド捕虜連合に至っては、サン紙のお詫びの存在さえ認知していなかった(拙論「上」参照)。小菅はサン紙の

「お詫び」掲載成功の根拠を、一部の新聞の論調の変化に求めているが、実際、元捕虜自身のリアクションをいかほど聞いたのだろうか。このような主張をするからには、成功の典拠と当事者の反応の実証を改めて明確に示して貰いたい。そもそもメディア・コントロールの成功と捕虜のトラウマや補償要請は別問題だ。筆者は現代思想掲載論文『捕虜はなぜ和解に領けないか英国捕虜・抑留者問題における齟齬の構図』(二〇〇〇年一月号)注において、橋本首相のお詫びのサン紙掲載は労働党政権応援をサンから得た見返りだとするジョン・バートル(エセックス大学、労働党研究)の解釈を提示し、「お詫び」の政治的側面に注意喚起した。トニー・ブレア首相とサン、すなわちマードックプレス(マードックはタイムズ紙とサン紙の所有者)との政治的密着とサンとのタグ・マッチによる政策・世論操作ぶりは、二〇〇七年のブレア政権終了後、現在急速に浮上し、批判を浴びている。ブレアのコミュニケーションチーフだったアラステア・キャンベルと、サン紙編集者トレヴァー・カヴァナフが二〇〇〇年一月のブレア日本訪問に同行し、「お詫び」を橋本首相からとりつけサンに掲載させた経緯の胡散臭さや、政権初期にブレアに特に目立ったメディア・コントロール駆使の傾向が、結果的にブレアの信用を失わせたと、メディア研究家ニコラス・ジョーンズは指摘している。

ジョーンズはその証拠をサン紙に掲載され

た日本の「お詫び」と、同年一二月にブレアが同様にサン紙に掲載させた「アルゼンチン政府、フォークランド紛争について謝罪」を事例に、本年一月、二月に続けて批判文を掲載している。つまり、妥協したのは、極東捕虜連合ではなく、サン紙の労働党援助を取り付ける事と日本との経済関係優先に必死だったブレアだった。天皇訪英時に「日本は大切な経済的パートナー」とテレビで繰り返すブレアに、元捕虜の多くは怒り心頭で、日本国旗を焼いたジャック・カプランをして「日本人とブレアのどちらにより立腹しているのかわからん」と言わしめた。

元捕虜の心情

そもそも、サン紙にお詫びが掲載される以前から、極東捕虜連合総書記（会長職）デイヴィッド・ウィルソンは、天皇訪英が予期された時点から「女王のゲストに失礼の無いようにする」決心を語っていた。もともと極東捕虜連合自体は、「テイザリントン率いる「日本強制連行生存者協会」との違和感もあり補償を期待しない傾向もあった。補償は必要と信じるものの、そこに焦点をあてると単なる金目当てと誤解されるからでもある。

王室派が多くを占める極東捕虜連合の代表らにとつて、正式な謝罪の要請先は国家元首である。英国人にとり、日本の「国家元首」も捕虜を苦しめた最大の責任者も「ヒロヒト天皇」だ。だから彼の継承者たる「アキヒト

天皇」の「謝罪」こそが真に価値あるものとなる。英国では天皇は神聖ローマ皇帝のような究極的な権威があると目され、よく交替し発言も変わる日本の首相の権威は比較的薄い。極東捕虜連合が橋本首相のお詫びの後も「天皇の謝罪を求めた」のは、それまでの謝罪に不満足という意思表示であり、小菅のいうようにサン紙お詫びが「収斂」「譲歩」をもたらしした訳ではない。天皇の謝罪には政府が従い、補償に結びつくという期待も元捕虜側に無かったとは言えない。また「補償請求をしない」決断は、「天皇訪英時には」との条件下であり、補償請求を完全に諦める確約でもなかった。

いずれにせよ、極東捕虜連合と日本強制労働生存者連合はダブルでメンバーになる者が多く、極東捕虜連合がデモや補償金要請を控えても抗議活動は起こるのは当然の成り行きだった。また、極東捕虜連合も、「抗議デモをしない」決定に全員が賛成したわけではない。決定に反対しメンバー脱退を宣言した捕虜の未亡人と息子の記事はエセックスのローカル新聞に大きく取り上げられた。この時期、デイヴィッド・ウィルソン総書記の板挟みの苦しみ——自分を初め捕虜の痛みを熟知し、天皇に直接謝罪と補償を訴えるのが当然とは思いつつも、威厳 (dignity) と女王への礼節優先を決断する——の様子は痛ましかった。仮りに、百歩譲って、元捕虜の「譲歩」にサン紙の「お詫び」が影響を与えたとしよう。

だが、それは日英両方にとって良いことなのか。日本国民側がなぜ謝るのか理解せぬまま出された、サン紙のポリテクスに利用された首相の「お詫び」によって、元捕虜らが天皇訪英時に補償請求を諦めたとして、それを讃える小菅の評価は、期せずして、「補償は必要なし」との主張と同意となる。彼女が明確な補償反対派ならともかく、その点は曖昧なまま、捕虜が満足したように報告するのは、大切な点をぼかした態度だろう。

とどのつまり、小菅の報告は、歴代英国大使・公使・書記官らを選びサポートした「和解」活動と、サン紙お詫び掲載や天皇訪英など、外務省が切った外交カードに対する牽強付会的な擁護である。そして和解の森・文化の夕べなど自らの関わった活動の「成功譚」というプロットに貫かれている。

これらの成功報告は、橋本首相のお詫びや天皇訪英を企画・担当した当時の大使館員達——藤井、林、折田から野上に至る各大使、沼田公使、泉参事官（現中国公使）に至るまでの政策を直接・間接的に讃え、実効を持たなかった面を隠してしまう。小菅の報告は結局のところ日本国民に対して学問の装いをもったメディア・コントロールとしての作用を持つのだ。

二、和解という誤解

和解成功言説を構築する理由は？

それにしても、なぜ小菅は、虚実をなйма

ぜ、装飾、編集し、マイナス面を無視し「政府による和解成功」だけを謳うのか？ 彼女自身の成功の強調や大使館に阿る態度は一種権威志向に見える。和解に携わる者は（和解の病）でもいうような、「自分だけが和解を行える」という自信や宣伝が伴うことが多い。

実際のところ、英国では一九九五年VJデイが盛んだった当時、大使館が肩入れた動き以外にも、日英相互理解を目指した活動が各種存在した。たとえばロンドン大学で開催された、ニューマルクシストなど若手から中年の人々・芸術家の団体による「ノーモア・ヒロシマズ」という、戦争を巡る日本理解を目指した大会議や街中でのデモ行進、軍備反対学生の手紙交換プロジェクト、白いポピーと呼ばれる平和活動家たちのナシヨナリズム批判や行進、著名な非核運動CNDの集会・礼拝・署名と平和行進、ロンドン市長による和解的礼拝、フリーランスのメディア記者らによる、英国メディアの日本報道の偏向や人種差別的側面を総合的に収集・批判した「Images of Japan」というプロジェクト（大和日英基金援助）等である。一種のバランス感覚とでもいうのか、英国ではある意見が多勢を占めると必ずリアクションが起こる。過剰な日本批判に対抗する、英国人による内部批判は、各地各様に起こっていた。

これらの動きを知らぬのか、なぜか小菅は『戦後和解』で、「対日戦勝に沸き返る八月の

英国で、平久保ら「ビルマ作戦同志会」だけが、粛々と日英和解のための礼拝式を挙行した」と書いている（恵子・ホームズも礼拝式を挙行しているのだが）。

ともかく小菅の繰り広げる言説・報告にはこのような箇所は枚挙に暇がない。真の問題は、知り得た情報を都合よく継ぎ合わせて書く方法論だけでなく、この姿勢——（大使館の政策成功）の結論を先行させた理論展開と事象選択にある。

当時の大使館の面々が、サンフランシスコ条約で解決済みとする政府の方針内で、九四年以前を遥かに上回る捕虜対策に奔走し、一定の誠意を示し、懸命の努力をしていたことは確かだ。広島出身の泉参事官（当時）が「原爆が無駄だったことにしたくない、捕虜の苦しみが無駄だったことにしたくない」と必死に述べたが、その言葉は真実だろう。だが捕虜問題抑制の傾向が、真の解決を上回ったのも事実だ。確かに、その後、捕虜問題は沈静の方向に動いたが、興味を失ったのは元捕虜たちではなく、経済力の落ちた日本に対抗意識や敵愾心が減った一般の英国人や英国メディアである。現に今なおティザリントンらは謝罪と補償を求めている。だが、日本では恵子・ホームズや小菅が説く「和解成功言説」が広まった。小菅自身が、大使館、とりわけ沼田公使に重用された後に果たした和解成功の広報的役割の影響は大きい。

大使館とのタグ・マッチ

小菅のこの姿勢——（大使館の政策成功）の結論優先の論調と捕虜問題の現実の複雑な実態を比較検討するために、九七年にケンブリッジで開催された捕虜問題会議を巡る、一連の事象を報告・検討したい。なぜなら、このようなアカデミック・コントロールを相互利用する学者と政府の関係性と力学は、現在の大学のシステム（予算や業績評価）や、アカデミックポスト減少の状況下では容易に起こりえる現象であるのだが、特に戦後戦争責任問題がそれに巻き込まれると深刻な結果を生むからだ。

小菅自身は夫君と共に渡英しケンブリッジ国際センター講師で長を務めるフィリップ・トウルのもとで研究員になる前、油井大三郎と共著で『連合国捕虜虐待と戦後責任』の岩波ブックレット（一九九三年）も著していた。『戦争責任研究』に捕虜関係論文を発表し、名目上に近いとはいえ戦争責任資料センターの「捕虜問題関係」担当だった。九六年、ブックレットを契機に筆者は連絡をとり、九五年のVJデイ騒動を知らぬという彼女に、実態の過酷さを伝え、渡英するなら研究を継続するよう薦めた。

すでにケンブリッジのダーウィン・カレッジでは、東京大学比較文化出身の南方熊楠研究者の松居竜五が九四年から二年間滞英し、狂奔的な捕虜問題の報道や日本バッシングに対応していた。過激な報道に問題を感じた現

地の在英日本婦人たちや英文学者で過去にケンブリッジで博士号を取得した山内久明（現東京大学名誉教授）、ケンブリッジ大日本人図書館員らと共に署名・募金を集め「日本と英国・戦争と戦後経験に基づく相互理解」と題した対話の会を九五年真珠湾攻撃記念日に開催していた。

だが当初、小菅自身は捕虜問題に新たににかかわることには躊躇した。英国滞在を始め元捕虜に会い、専門家として参加を請われても、「現在は別のこと（赤十字）を研究しており、松居氏の興味深い提案にものりきれないでいる」と筆者にファクスで伝えてきた。九六年夏から筆者が英国で調査を開始しケンブリッジを訪問、共に会議をしようと誘い、会議支援の企業協賛金にも申込んだ。だが小菅には忌避感もあり、当人の言によれば、捕虜問題は自分の本意で始めたことではなく、ブックレットなども何も知らぬ大学院生をだましてやらせたも同然で、『戦争責任研究』執筆で歴史家として色がつくと言明した。九六年一月のケンブリッジ戦没者慰霊祭での献花前夜も、捕虜問題と取り組む必要を説くこちらに、電話越しに、捕虜はいつか死ぬし、献花はするが、歴史家は歴史にかかわるべきではない、と否定的だった。筆者はかりにも捕虜研究をしてきた人が言うべきことではなく、誤解が続き未来の子供たちのむやみな叩き合いを危惧すると抗議した。

小菅の忌避（と後の熱心さ） 両方の行動原

理の背景には日本特有の研究ジレンマとジェンダーの特質があるようだ。研究しつつアカデミックポストを待つ若手の状況では、研究内容と政治色をどうするかは困難な課題だ。特に歴史学分野における戦争研究は右左の分派対立の緊張のコンテクストに嵌まりがちだ。当時、本人は家庭と子供を持つ女性として、研究継続の可能性や捕虜研究が就職を遠ざける危惧を感じていた。その状況ではフィールドワークも限定される。

その後、ケンブリッジの慰霊碑の前でひざまずいて献花した様子が周囲の捕虜に感動（と反発）を起し、一躍「時の人」になった彼女は周囲の反応に驚きながら、捕虜問題にとりくみ始め、聖書のサウロのパウロへの変身のごとき一八〇度の転換をした。

だが、その熱心さは、次第に捕虜問題の独占願望へと変容した。日本に対する報告でも、英国のVJデイの様子もそれ以前の他者の報告や論文は引用せず、新聞記事の再構成により彼女の発見のごとく『世界』に報告された。英国新聞のインタビュでも戦争責任資料センターの捕虜問題担当者であると述べ、日本の捕虜問題の関心の薄さを語り、既存の研究は伝えていない。彼女と協力して和解活動（ケンブリッジの文化の夕べ）を行い、最後は不仲となり、全国退役軍人会会長に対し、小菅が無礼（Rude…訴えた側）に意図はないだろうが、女性が用いると性的な無礼行為の意を含みかねない」と訴えたこともあって、その座を

追われた退役軍人会ケンブリッジ支部書記だったロン・ウェルズは、当時は振り返りこう綴る。当初は彼女の捕虜への関心の強さに感銘を受けた彼は、次第に彼女が変貌したという。

ミセス・コスは「ミセス・コスは真実を見るに疎く誇張をしがちだった。操作的で自分がやること全ての舞台の中心でないと気がすまなかった。端的にいえば彼女は自分が、自分だけが、何でもできると信じている自己顕示（尊大さ）があった。ミセス・コスが大使館を満足させようとする強迫観念は偏執的の域に達し、私は彼女を大使に褒めるよう絶えず依頼されていた。

それまで注目度が低く政治活動の一環のように目された捕虜研究に関心を失っていた小菅自身は、突然のレコグニション（認証）を得て戸惑いつつ陶然の風だった。一九九六年一月以後、捕虜問題に執心する様子に周囲は、やや面喰いながらも当初は歓迎した。だがある時期からその姿勢は、大使館とのタグ・マッチによるアカデミック・コントロールに大きく寄与することになる。

その契機は、平久保正男の発案による、和解活動・捕虜と日本の相互理解活動に携わる若手の学者らを大使館が招いて行ったヒアリングにある。

既に記したように、ケンブリッジでは松居らによる、五〇人あまりの聴衆と長時間のデイスカッションミーティングがあった。これには日英の平等な対話活動を行うBCFG

(ビルマ戦線日英同士の会)の平久保正男、ロド・ジェイムズ、泰緬鉄道元捕虜のジェイムズ・ノーブルやアラン・エリオットが参加した。九五年の捕虜問題最盛期にこのような会が持てた事は後から知ったが、当時の雰囲気からすれば大きなブレイクスルーだといえる。小菅も招いての大使館ヒアリングは、ケンブリッジで彼女がひざまずく姿が大きくローカル紙に報道された一九九六年一月の後に行われ、藤井大使、沼田公使、泉書記官らが同席した。

小菅は、ケンブリッジでは文化を紹介し日本への関心を呼んでから対話を進めるべきと地元民にアドバイスを受けたため、文化の会を開きたいので藤井大使夫人などの参加を願うと述べた。松居は、捕虜・戦後問題解決の会議や公平な対話の必要を論じ、会議アレンジを提案し、奨励された。筆者は会議の提案と共に捕虜の細やかな痛みを知る必要性と日英間の亀裂の将来的影響の懸念を伝えた。過去のインタビューをもとにテレビ局で九五年に制作した捕虜の番組(「英国50年目の夏、朝日系列フリーゾーン2000」)をすでに視ていた大使館側は、オーラル・ヒストリーで分かる元捕虜の実態を伝えて欲しいと言った。その後、再び、小菅と筆者は外務省調査員にと請われ、筆者は、文化の催しに資金が必要とし、研究継続を願う小菅に、初年度の機会を譲った。

だが、ケンブリッジの文化の会の詳細を記

した、小菅発表の『世界』論文(一九九七年一月)では、以下のような物語となっていた。「文化の夕べ」の二回目、八月一日の会に、ロン・ウェルズら主催者が日本大使館に招待状を送ると「藤井宏明日本大使(当時)夫妻が会場に姿をあらわし……日本大使と元英軍捕虜との〈対話〉——不思議な和が会場を覆った」等、奇跡的な出会いのような描写が続く。しかしこの催しは当初から大使館の理解のもとにあり、藤井大使側には参加への合意は存在した。また後述のごとく、この時期の小菅は一月開催の非公開の捕虜問題会議のため、大使館と密接に連絡を取り合っている。参加した藤井大使自身の決断は尊重されるが、文化の会が盛り上がり自然に大使を招き入れたかのように日本に伝えるのは、「和解に利用されたナラティブ」だ。

なお、この文章では、ケンブリッジで松居や地元民が開催した「戦中戦後の体験に基づく日英相互理解の対話の会」には触れるが、捕虜の出席や活発な討論の様子は記さず、地元捕虜クラブ「ヤスメクラブ」のメンバーがこの会に「満場一致」で「不参加」を決めたと連絡してきたと否定的に強調している。しかし、「満場一致の不参加」の箇所が引用された、ヤスメクラブ書記の手紙の原文はこうだ。

「若い学者とは交流を望まないと委員会は皆一致した(傍線筆者)」committeeの unanimous decisionであり、会員全部の「満

場一致」ではない。続けてその理由は、「私たちは、当時の日本政府と日本の天皇の直接の命令のもと父祖世代が行った極東捕虜に対する非道な扱いについて、いかなる形であれ、若い世代を巻き込みたくないからである」とし、交渉相手は次世代でなく、これまで謝罪したことのない日本政府と天皇だ、と明言している。ヤスメクラブは結局、小菅らの試みにもその態度を変えず、翌年は彼女が献花しないよう手筈を整えた。

桜と藤の造花が枝垂れるホールで日本舞踊、日本食・日本酒の振る舞い、茶道に着物展示、舞妓や芸者の写真、折り紙に大使館の「日本に行こう」ストールが並び、バレエや英国軍歌を組み合わせ、和装の研究員らが捕虜らとワルツを踊るなど、工夫を凝らした「文化の夕べ」を喜ぶ現地の人も確かにいた。日本食を喜ぶ子供もいれば、会の途中で雰囲気居たたまれず逃げるように場を去る元捕虜もいた。結局、「ヤスメクラブ」は参加しなかった。地元のみそかな反発の大きさは、小菅の帰国後とロン・ウェルズ放逐後、後任の職についた長が、ただちにケンブリッジ退役軍人会と日本交流の記録文書を破棄し、歴史から消した事にも伺える。

三、日英捕虜問題会議—アカデミック・コントロール：会議の変貌

この会議は当初、秋に日本に帰国した松居が小菅や中尾の協力のもと日本側の計画を担

当する手筈だった。一方、ひざまずき手を合
わせる小菅の姿は、「謝罪する日本の乙女」
として表象され、BCFGの代表ナネリーは
ポストカードにして全国のビルマスター（ビ
ルマ戦線退役軍人会）に送付した。小菅は新
たに「これを機会に何かしたい」と平久保に
ファクスで会議を提案した。そのころ松居は
日本で小菅から委託され（のちに小菅は松居
が勝手に始めたと述べている）、会議の協力者
を募り、捕虜問題に理解の薄い日本に対し英
国の状況を説明し、会議参加説得を開始した。
だが年があけ、天皇の訪英計画が持ち上がり、
夏前に沼田公使と小菅の食事会談の後、小菅
は会議について口をつぐみ、突如「会議は小
菅・トウル・ラインで行う」とのファクスが
関係者に一方的に通達された。結局、人選は
一切が小菅らと大使館に掌握され、それによ
り会議の内容は変化し、書籍として出版され
るにあたり、内容は一層変化した。会議の顔
ぶれと会議の論文集の題目を本論最後にリス
ト化したが見れば一目瞭然であろう。

会議の条件―「補償」「和解」論の禁止

沼田公使と元日本大使ボイド氏との交流も
あり、会議は大使館の（庇護下）でのケンブ
リッジ国際センターでの開催が正式に決定さ
れ、同時に一種の猿轡ともいえる条件が附带
された。以下は当時会議関係者に送付された
連絡事項である。

開催の経緯と運営については、本会は、

大和日英基金および在連合王国日本大使
館より資金援助を、国際研究センターの
協力を得て開催されます。会の準備・実
行についてはトウル博士がその責にあた
り、ラージ博士、ワイリー博士および小
菅がコミッティーとして協力し、とくに
日本人招待者の推薦と出席交渉につきま
しては小菅が担当しております。

課題…本会は「第二次大戦期の極東に
おける捕虜取り扱い」にさまざまな研究
領域から焦点をあわせ、学問的・非政治
的な論議を通して新たな研究視座を提示
するという大きな課題としており
ます。中立性の維持と冷静で充実した議
論の実現のため、以下の点にご留意くだ
さい。

(1) 感情的・感覚的な議論をさけること。
(2) 個人データに依拠する報告やコメ
ントをさけること（個人の証言や個人を
資料としないこと）

(3) 「戦後補償」は扱わないこと（「回
復・復興」の問題として論じることとは可
）

(4) 「和解」を議論しないこと
公用語を英語とし、日本語での報告・議
論はご遠慮ください。

非公開性…本会は非公開となっており
ます。傍聴はできません。事前および会
後、学会の情報をもマスコミ・雑誌等に公
表しないようお願いいたします。¹²⁾（傍線筆者）

オーラル・ヒストリーの手法で、捕虜と日本

側の文化摩擦を研究していた筆者はこの条件
だと発表が不可能なため問い合わせると以下
の返答を得た。

「〔捕虜〕個人データ」に基づいた報
告および議論を行わないことはコミッテ
ィーで同意され、さらにスポンサー（大
和日英基金）との契約の一部となってい
ます」：「個人に基づいたデータに基づ
く議論や報告は、大和日英基金との同意
に反するおそれがある」、「個人データ」
（公刊未刊とに問わず）に基づく議論は
えてして感覚的印象的なものになりやす
く、冷静な議論のさまたげになるとい
う配慮があります」¹³⁾

補償賛成派の回避

だが、会議のコメンテーターの役割を依頼
された後、個人証言引用の可否を再確認する
と事態は変わっていた。小菅によれば「その
点はジェイン・フラワーが出ることになつた
から、どうしてもよくなった」。つまり、付帯
条件は、個人証言の信憑性や学問的中立性と
いうより、日本政府に補償と謝罪を請求する
政治的ポジションを崩さないジェイン・フラ
ワーを回避することが目的だったことになる。
ジェイン・フラワーは泰緬鉄道捕虜フラワー
中尉の娘で、泰緬鉄道の捕虜の証言収集で知
られる（捕虜の中には彼女の将校階級中心主義
や証言独占状態を忌避する者もいる）。これは
大使館が捕虜問題研究に最も詳しい内海愛子

の参加を回避したのと同根だ。天皇訪英計画が提出されてから、大使館サイドは、補償や謝罪問題の扱いについて非常に神経質だった。内海の研究は朝鮮人軍属に対する共感に基づく日本批判と反省の要請が前面化するため、当時、会議を担当した泉書記官はその点に怒りを示し参加に反対した。戦犯問題研究家のジョン・ブリチャードにも同様の警戒が向けられた。

確かに会議の結論が〈補償は必要〉となれば、ティザリントンの日本訴訟援護や天皇謝罪の後押しになりかねない。当初の段階では(リスト参照)内海やギヤヴァン・マコーミックの声が掛かっている。松居は同時に芳賀徹(新しい教科書をつくる会顧問、日蘭の戦争をめぐる会議座長)にも声掛けを考え、右左の脱構築も目指したようだが、大使館側は、オーストラリア関係研究者でまとめた著書『泰緬鉄道と日本の戦争責任——捕虜とロームシヤと朝鮮人と』(ギヤヴァン・マコーミック、内海愛子、ハンク・ネルソン、明石書店、一九九四～五年)のような日本の責任を問う結果を恐れたように思われる。

筆者らが当初、捕虜問題の会議を構想したときは、帝国主義・植民地主義・比較文化、タイや元植民地の位置づけやアジア・ロームシヤ問題、国際法などが念頭にあった。だが、結局、日本側からは長期的に捕虜・抑留者問題に通暁した人材はあまり呼ばれぬ会議となった。岩波書店の馬場公彦氏も招かれた。ト

ウルが発表要旨に関心を持たなかったため松居の発表は計画から外れたが、いずれにしろ、夏以前に、松居は会議の成功は大事だが、小菅と関わりを一切持ちたくないと言え、会議の成功を祈ると言い置いて会議アレレンジから手を引いていた。

結局、九七年一月に三日にわたり開催された「捕虜についての日英会議」は大使館の意向が色濃く反映され、〈非政治的〉という名のもとに政治色が濃いという背理を負った。

あらゆるマニピュレーションと全体を抱え込もうとする一種の権威志向を差し引き好意的に見れば、小菅が、政治的制限のもとで彼女なりの理想を実現しようと必死の努力や交渉をした事は察せられる。だが会議一カ月前の『世界』報告文や、会議後の各種報告では、大使館の意思に必死に沿いつつ自らの功績に焦点を当てる姿勢は否定しがたい。誰もこんな会議を喜ばないと憂えていた小菅も、その後、職を得て日英で論文集が出版される頃には、自らの拙い部分やアカデミック・コントロールは語らず、和解活動研究家「マーガレット・コスゲ(マーガレットは婚姻に際しかトリックに改宗した洗礼名とのこと、英語版はこの名で出版)」を悲劇のヒロインとする「和解のナラティブ」を構築し、自らを前面に押し出し、和解の成功言説はさらに強化された。

英国版『The Japanese Prisoners』—— 消えた植民地批判と日本批判

だが、まだ会議の段階では林博史や捕虜問題に詳しい永井均は会議に参加していた。その後、会議に基づく論文集が木畑洋一、マーガレット・コスゲ、フィリップ・トウル編集(実質的には後者二名と木畑は述べる)により、英語版として出版された。だが依然政治的色彩はつきまとった。出版日は捕虜に対して英国政府が恩賜金支払いをする決定の広報の「偶然」一週間前となったし、論者も選択された。

論文集に個人補償要請の可能性について藤田久一が触れているが全体からすれば一部だ。同時に、会議の中にかろうじて残っていた二つの大事な要素が姿を消した。駒込武や日本統治下のビルマについて発表した根本敬の論文が消えたため、捕虜問題と日本の大東亜共栄圏構想の関連や、元植民地の声は議論の遡上から消えた。また、日本軍批判の強い林博史の論じた、「日本政府の中国人捕虜扱いの過酷さ」や、永井均「BC級戦犯処理を自国で行い挫折した経緯」の論文も掲載されず、そのため、捕虜問題に對峙する研究者や日本批判をする日本人研究者は不在だとの印象を、英国側に強く残した。林らには不掲載の連絡や編集方針の説明は無かった。

それ以外の論文は、日本のJSP取り扱い、ソ連抑留者の問題提示、白人を過酷に扱った日本人の人種観、赤十字へ日本の憧憬、アーネスト・ゴードンと憲兵永瀬隆の和解と青山学院学生らによる和解と対話の横浜慰霊祭の

試みなど、日本側の被害と努力が目立つ。

本書は「赦すことができた」という元捕虜
ダドリー・ケイブの言葉と理想的な和解の様
子でしめくられるが、全体として日本正当
化の印象を与え、「ホワイトウォッシュ」(都
合の悪い部分を隠して綺麗に見せかける)との
批判も寄せられた。英国の捕虜研究家は「赤
十字への憧れより、収容所での赤十字救恤物
資の隠匿の実態と理由が知りたい」と述べた
が、確かに、元捕虜らが関心を抱く諸点への
取り組みは少ない。論文題目はそれなりだが、
会議への呼びかけで初めて捕虜問題に取り組
んだ研究者も多く、全体としてサー・ヒュ
ー・コータツツイの次の指摘は的を射て
いる¹⁶。

これは日本の捕虜扱いに関する論考を
まとめた書だが、本問題に関連する様々
な事柄に関する包括的な再検討でもなけ
れば、この悲劇的な主題についての最も
権威ある (definitive) 仕事でもない。わ
ずかながらに触れられている側面にして
も、雑駁な扱いしか受けず、幾つかの論
文は均衡がとれ読む価値があるが、全体
としては落胆させるものだ。また、本の
文献は、いくつもの関連ある重要な本を
落としている (拙訳) (*The Japan Society*,
pp.87-88, 2000)

実際、せめて文献リストに日本の捕虜研究
の蓄積が掲載されていたら、元捕虜や英国人
読者らの反応も異なっただろう。英国は、日

本人は捕虜に無関心というステレオタイプが
強いからだ。たとえば、二〇〇五年、タイに
元捕虜の慰霊旅行に同行した際、私は吉川利
治の『泰緬鉄道 機密文書が明かすアジア太
平洋戦争』(同文社、一九九四)を持参した。
ある元捕虜が、部屋で詳しく見たいと本を持
ち帰った。日本語は読めずとも、多くの統計
や、写真、労働者の悲惨な状況の研究の綿密
さは元捕虜にも伝わった。翌日、捕虜に付き
添う息子が本を返しながら、こう述べた。

父はね、昨日、この本を見ながら、シ
ョックに打ちのめされていたよ (He
was absolutely shocked)。父は日本人は
何も知らないと思っていたんだ。こんな
に知られているとは思ってもみなかった
んだ

結局、会議の論文集によって、英国の元捕
虜たちは、日本に蓄積する捕虜研究と問題へ
の関心を知る機会を逸した。それらを知れば
元捕虜らは日本を再評価しただろう。また
「自国批判」を尊重する英国のこと、日本人
による日本への批判的な論文が入っていたほ
うがかえって日本弁護も起こったと考えられ
る。

会議録論文集日本版『戦争の記憶と捕虜』

——ロマン化される会議

フラワーやプリチャードの論文は村山資金
により五巻組で出版された『日英交流史』の
軍事編に掲載されている。だが「個人証言の

信憑性」を盾に参加を拒否されたかれらは、
なぜ会議に参加し得たのか。この経緯は、小
菅の日本版に掲載された「なぜ、会議に捕虜
を招かなかったか」とのヒロイックなロマン
化された挿話と関連する。

：日英捕虜会議への(体験者)招待を
断念し、学者のみによる会議をデザイン
しようと決めてまもなく、ケンブリッジ
に暮らす元捕虜の一人が、自分を会議に
招きスピーチさせてほしいと懇願してき
た。私は彼の申し出を断った。彼が納得
してくれたものと思った。しかし、彼は
在英日本大使館宛に、コンファレンスの
英国側のオーガナイザーであるトウル氏
が、元英軍捕虜を排除した日英捕虜会議
を開こうとしていると、抗議の書簡を送
った。トウル氏も、元捕虜たちが参加す
ることになると学問的中立性維持できな
くなるという理由で、いわゆる体験者の
招待に否定的ではあった。だが直接拒絶
したのは私だった。なのに、彼は、ひた
すらトウル氏が会議を「ハイジャックし
ようとしている」のだと抗議したのであ
る。『戦争の記憶と捕虜問題』東京大学出
版会、「あとがき」二五六～七頁

元捕虜の横暴と我侪に対して学問的中立性
のために戦った自らの勇気と責任を深く認め
る謙虚さのエピソードだが、実態はどうか
この捕虜は一九九五年ケンブリッジで開催さ
れた「日英相互理解対話の会」のゲストスピ

カーだったジェイムズ・ノーブルである。彼は当然、ケンブリッジで引き続き行われる会議に出席できると考えたわけだ。彼は『捕虜殺命令書』追究のためにも参加を要請した。沼田公使に連絡し、自分でなければフラワーやプリチャードを出席させることを要請した。だが、関係者全員が、会議の存在の黙秘を命じられていたのに、情報はなぜノーブルやフラワーに届いたか。当時、小菅は、会議の実権を掌握したことに嫉妬した松居が漏らしたと非難し、彼を驚かせた。だが残された文書資料とフラワーの口述は、会議の存在をノーブルに最初に知らせたのは当のミセス・コスゲだとしている。それならば、彼女のインサイダーの情報で会議開催を知ったから、ノーブルは彼女に「嘆願」し、会議援助元を知らされたから日本大使館に交渉した。知らせた「ミセス・コスゲ」に対しては、内々の情報源であることに加え婦人を守る道徳からも、攻撃の矛先がトウルに向けられた。だが、この「あとがき」ではノーブルは理不尽な捕虜として本の中に未来永劫、表象され続けるばかりか、それ以前の会議の微妙な経緯を隠す装置とされた。ちなみに「あとがき」はわざわざ英語訳が作られ、木畑・小菅の連名で英国中の図書館に日本語版と共に送付され、英語版にあとから付加する前例のない事態として図書館員らを不思議がらせた。

本当に「正当化」されたものとは

「コータツツイはその批評文で、トウルが最初に「西欧では捕虜問題は常に興味と関心を呼び起こしてきた」とすることに異議を唱え、「捕虜問題 (the issues) の実情にはそぐわない (do not justice to)」、それより人道に対する普遍性を主張したほうがよい、と述べる。だが小菅はこの箇所を誤訳し、「捕虜の受けた不当な苦痛についての道義心を欠いた叙述がある」と知日派でしられる英国人の批評で厳しい批判を受けた(傍線筆者)」と訳し、不当であるかのように記している。だが、ここでも、問題の本質は誤訳自体ではない。これら誤訳やノーブルの例など巧みに編集された物語を、自らの行為を正当化する「装置」に利用したことである。

実際、フラワーやプリチャードなど補償賛成派の会議参入を許したことは、会議オーガナイザーとしては、大使館や大和日英基金の意図に反する失策となる。それゆえ、ノーブルを無茶な捕虜として表象し『世界』報告でフラワーを持ち上げ、本出版を喜ぶ地元の様子や広報など、種々の方策により失策を消す戦略が図られたようにみえる。大使館の意志(と彼女が解釈した方針)に沿って論文集を刈り込んだ事実やアカデミック・コントローラを語り消す目的にノーブルやコータツツイを用いたのは問題だし、ヤスメクラブの手紙の、我田引水的な引用も元捕虜らに失礼だ。全体として和解成功をフェイクしたことが読者や

元捕虜に最も危険な点だといえよう。

「和解成功言説」は、東京大学出版会・中公新書『世界』などの媒体への信頼性に支えられ読者と和解成功の「信者」を増やし、石橋湛山賞のお墨付きを受け、独り歩きを始めている。それを広める小菅自身も、自分の書いた幻を信じているのではないかと思えるほどだ。

和解成功言説の行方

以上、拙論の上・中・下において、日本に伝播する和解成功言説と、英国の実態の誤差、日英の和解解釈のずれ、それらを招く状況を考察した。では「誤ったフィードバックである」「和解成功言説」は、はたして我々をどのような問題に導くのだろうか。

第一に、元捕虜の現実の苦しみが日本に十分伝わらず、捕虜が赦し癒されたと思ひ込む日本側とのギャップを広げた。日英和解が議論されないのは成功のおかげではなく、当事者の減少と、日英双方で意図的に作られた無関心の故だ。

第二に、謝罪と補償についてアカデミック・コントローラの影響で真剣な議論が迂回され、訴訟も終わり、元捕虜やBC級戦犯(法務死者) 関係者が不全感のうちに次々と亡くなっている。彼らは貴重な情報源であると同時に、真実を知る権利を最も強く持つ人々であるにもかかわらずだ。彼らの心情と実情を聴き取り、真の解決を図れる時間は残

り僅かだ。和解成功言説を創作し歴史に関わった歴史学者や和解活動家は、捕虜たちや元抑留者らの無念の死に、いかなる責任をとれるのだろうか。

第三に、真の相互理解が先延ばしになった。捕虜が死ねば問題が終わると言う者もいるが、捕虜問題は数年・数十年おきに再燃し常に反日意識の礎となっている。整合性のある後始末をせぬ限り、将来、当事者不在で解釈だけを戦わせる無益な歴史論争が増加するだろう。幼児期に抑留者だった人々は、まだ六〇歳代であり、補償要請はあと数十年は継続する。元捕虜自身や捕虜の子供たちも研究や批判を続けている。

第四に、植民地主義・帝国主義と共に捕虜問題の議論がないまま、日本国内の鬱積がたまっている。右派は「なぜいつまでも日本だけが謝るのか」と怒るが、日英だけでなく元植民地の立場を調査し見直しを図らねばこの緊張は終わらない。「和解成功言説」は実態調査を封じ、和解と相互理解につながる予算を減らした。

第五に、フィクションともいえる『戦後和解』のために、中国や「慰安婦」問題に、日英和解の前例を当て嵌める動きが起こり、一部を小管が担っている。だが数々の誤報に支えられた空中楼阁の幻の成功例を他国に当て嵌めても虚しく、当事者を侮辱するだけだ。それぞれの国・文化・事情・歴史経緯の中で、求められる和解は異なっている。

第六に、この「和解」は、実は日英・日豪・日米間の軍事協力を促進する力として用いられ、イラク戦争応援に一役買っている。各国の退役軍人会や元兵士の過去の軋轢や反感は、現在の軍事協力の邪魔であり、「和解成功」のキャンペーンはその摩擦力を減圧するからだ。(拙論(上)の注(9)参照)

最後に、誤った政策称賛と和解のフィードバックは、これまでの政策が完璧かのような誤解を与える。外交は試行錯誤が当然であり、完璧などあり得ない。必要なのは達成成果だけでなく不達成の部分を見つめ、冷静に検討することだ。国連の安全保障理事会入りを望み和解政策を進めてきた政策担当者らに、誤った情報を与えて、今後の政策を誤らせてはなるまい。それは現実の「国益」を考える者にとつても、どこの国の民にとつても益にならない。

「^{リコンシリエーション}和解」とは、簿記の帳尻が合うことをさすため、平等に対話し戦争関与国の言いつ分の帳尻を合わせるのが和解の原義だ。ならば、遺憾ながら、現状の和解成功説は「粉飾決算」なのである。今後、戦争・植民地を巡る本当の「帳尻合わせ」に対する、人々と「学者」・民間調査者・行政の、問題解決に向けたきちんとした協力体制が心から望まれる。

(なかお・ともよ／岡山大学大学院准教授)

●以下は会議を巡る一連の流れ

- 一九九三年 捕虜ら日本企業訴訟開始
- 一九九四年 蘭、英らの捕虜、損害賠償訴訟
- 一九九五年 八月一日VJデー 一二月八日 [Britain and Japan: Mutual Understanding Based on Wartime and Postwar Experience] 松居ら、ケンブリッジ、ダーウインカレッジにて開催 報告書作成
- 一九九六年 四月 小菅夫妻渡英 八月中尾渡英
- 一九九六年 四月 一〇月 松居帰日
- 一九九六年 一月 小菅信子慰霊碑に献花
- 一九九六年 一月 大使館ヒアリング
- 一九九七年 一月 松居より以下の顔触れに英国の状況説明と会議のプラン提示

ギヤバン・マコーマック(オーストラリア、歴史学)、内海愛子(恵泉女学園大、捕虜研究・戦犯裁判研究)、藤田久一(東大、国際人道法・戦犯犯罪)、木畑洋一(東京大学、国際関係論)、油井大三郎(東京大学、社会学)、斉藤和明(ICU、比較文化)、根本敬(東京外国語大学、ビルマ近現代史)、林博史(関東学院大学、戦争犯罪裁判論)、長谷川知(共立女子大、英国史)

- 一九九七年三月 小菅より松居に「日本人研究者八名を正式招待」案の連絡。松居、「戦争捕虜・抑留者問題研究会 事務局」設置
- 一九九七年三月三十一日

事務局主催、会議参加予定者打ち合わせ。会議では司会、発表、コメントーターの役割がある旨伝えられ、日本側の会議開催希望日程決定(ニューズレター四月一日)

一九九七年四月一二日

参加候補者が希望論題を纏め、英国に連絡するよう、松居を通し小管より指示

一九九七年五月 打ち合わせ二回目

一九九七年六月頃 小菅リトウル・ライン宣言
なお、木畑は油井から座長を依頼されたため、それ以前の会議準備とケンブリッジ会議は別枠と認識している、と後に述べている。

一九九七年八月 林、永井、木畑、一時帰国した中尾、斎藤らと交え、中尾制作の捕虜問題ビデオ『英国五〇年目の夏』鑑賞、意見交換

一九九七年一〇月 小菅『世界』報告文「英軍捕虜たちの終わらない戦争 凍りついた記憶を対話の水脈に」(一二月号掲載)

一九九七年一月一四～一六日

Anglo-Japanese Conference on Prisoners of War
ケンブリッジ、インターナショナルスタディーズ・センターにて会議開催。日本側発表者…小菅信子、斎藤和明、駒込武、根本敬、小林英夫、山崎公士、林博史、永井均(座長)・木畑洋一、コメンテーター…中尾知代、デイスカサント…藤田久一、ゴードン・タニエルズ、参加者、在英日本大使館員、調査員、岩波出版社・馬場公彦)

一九九七年二月 沼田公使 帰国

一九九八年一月 トニー・ブレア首相、サン紙記者らと来日

一九九八年一月 橋本首相 サン紙「お詫び」発表

三月 小菅帰日 五月「世界」報告文

「統・英軍捕虜たちの終わらない戦争 悪夢から和解に到る道」(六月号掲載)

一九九八年五月 天皇訪英 抗議デモ

一月 日本、捕虜裁判請求棄却

(二〇〇〇年五月) 拙論「捕虜たちはなぜ和解に領けないか」現代思想 青土社

二〇〇〇年九月一九日付(実際は捕虜への恩賜金支払発表一週間前) 会議を元にした論文集英語版発行

日本側執筆者 藤田久一、小林英夫、古屋はるみ、

木畑洋一、小菅信子、斎藤和明
二〇〇〇年一月七日 恩賜金支払発表
二〇〇一年一月 フィリップ・トウル論文「憎しみから和解への道」小菅信子訳『世界』一月号掲載

二〇〇一年三月 『日英交流史』軍事編出版
二〇〇一年七月 米国 個人訴訟認める方向の法案
二〇〇一年九月 イラク戦争の原因・九・一一勃発
二〇〇二年三月 捕虜裁判請求棄却(東京地裁)
二〇〇三年五月二六日

会議を元にした論文集日本語版発行
日本側執筆者 藤田久一、古屋はるみ、木畑洋一、小菅信子、斎藤和明

二〇〇四年三月 最高裁 捕虜対日裁判請求棄却(最高裁)

二〇〇五年八月小菅『戦後和解』(中公新書) 出版
〇六年石橋湛山賞受賞

二〇〇五年八月一五日 「極東捕虜連合」解散
●英国会議 発表題目リスト(拙訳)

駒込武「捕虜扱いの歴史的ルーツ…日本イメージと人種ヒエラルキー」
スーザン・タウンゼンド「大日本帝国戦時中の文化、人種、権力 一九三一年～四五年」

小林英夫 「日本人捕虜に対する中国の取扱」
ケント・フェドロヴィッチ「日本人捕虜に対するオーストラリアの取扱」

斎藤和明「クワイ河捕虜收容所の日本側の捕虜観」
クリフォード・キンヴィグ「泰緬鉄道の英国人捕虜」

林博史「中国人捕虜に対する日本の取扱」
根本敬「日本占領期のビルマとビルマ人への影響」

小菅信子「国際赤十字、ホーリーシーと極東の捕虜問題」
ジェイン・フラワー「国際赤十字委員会と捕虜」

永井均「日本軍による戦犯裁判」

ジョン・ブリチャード「国際戦犯裁判」
山崎公士「東南アジア戦の捕虜扱い問題が提起した法的課題」
藤田久一 まとめ

●英語版論文集執筆者リスト(拙訳)
フィリップ・トウル「日本軍と捕虜」
ロバート・ヘイヴァース「チャング捕虜收容所と泰緬鉄道」

クリフォード・キンヴィグ「連合軍捕虜と泰緬鉄道」
ケント・フェドロヴィッチ「敵を理解する…オーストラリアの日本人捕虜と諜報機関、政治的戦争」

藤田久一「捕虜と国際法」
スーザン・タウンゼンド「大日本帝国の文化、人種、権力」

古屋はるみ「日本の人種的アイデンティティと第二次大戦…捕虜扱いの文化的コンテクスト」
木畑洋一「英国人捕虜に対する日本の取扱」

マーガレット小菅「赤十字と日本の捕虜扱い」
小林英夫「戦後の海外における日本人取扱」
斎藤和明「和解に向けて…アーネスト・ゴードンに対する日本の反応」

●日本語版論文集執筆者リスト
フィリップ・トウル「戦争捕虜問題をめぐる西欧と日本」

藤田久一「国際法からみた捕虜の地位」
フィリップ・トウル「ゲリラ戦と捕虜取扱」

クリフォード・キンヴィグ「連合軍捕虜と泰緬鉄道」
ロビン・ヘイヴァース「捕虜の楽園?—チャング收容所の実相」

ケント・フェドロヴィッチ「敵を知る—オーストラリアにおける軍事諜報活動・政治戦・日本人捕虜

一九四二～四五年」

スーザン・タウンゼント「戦時下の大日本帝国における文化、人種、権力」

古屋はるみ「第二次大戦期における日本人の人種アイデンティティ」

木畑洋一「西欧文明」への挑戦?——日本軍による英軍捕虜虐待の歴史的背景

小菅信子「赤十字と異教国」——近代日本の「非宗教」(「非宗教」とナショナリズム

齋藤和明「和解への道程——クワイ河収容所をめぐる」

(1) 恵子・ホームズ批判にかなする小菅報告は「原爆に(救われた者)の語り——平和教育の一モチーフとして」(山梨学院生涯学習センター紀要 四号 四三—五五頁)。

(2) BCFGは将校階級が多い点で一般のビルマ戦線兵士や元捕虜と距離がある。

(3) 現在出版されている小菅信子論文・科研調査報告書・書籍・エッセイ・新聞記事から検討。

(4) 朝日新聞 夕刊 二〇〇八年二月一八日カプランと永瀬隆の交流に感動する外務官の記事は一例である。

(5) Nicholas Jones H P 参照。大和基金(二〇〇七年六月二日)メディア「Spinwatch」NPOのHP(二〇〇八年二月一三日)参照。

(6) ウイルソンとの当時の面談より。

(7) デイヴィッド・ウイルソンほか、本論に現れる元捕虜・各種催し・VJデイの様子は当時のフィールド調査・聴き取り調査に基づく。筆者は九四年から調査開始、九六—九八年秋まで滞英、調査研究。エセックス大学に在籍(岡山大学講師(助教授)、オーラル・ヒストリーをポール・トムソンに、ポストコロナ理論をピーター・ヒュームに師事。(ブリティッシュカウンシル奨学

金等などによる)

(8) *Britain and Japan: Mutual Understanding Based on Wartime and Post-War Experiences. Record of the Discussion Meeting held at Darwin College, Cambridge, on 9 December 1995, p.3-5* 参照。

(9) 発言の真意は、トウルが、捕虜の死後なら歴史的に中立的研究が可能かもと小菅に言ったことを指すと、後に本人は解説した。

(10) ロン・ウエルズの回顧文。二〇〇〇年四月一日付、公開の許可有。エリオットは和解の主導権争い、ウエルズのパーソナリティとの軋轢を問題とみる。小菅は第三回の「文化の夕べ」に招待なく筆者が出席し迷惑したとの非難文を各所に送付した。ウエルズ氏は大使館パーテイで筆者招待の事実を明言しており、小菅もその招待を熟知していた事は(筆者不在のため、会までに聞く間は無かった)電話伝言に残る。大使館の指示以外に小菅が「文化の夕べ」に筆者の参加を避けたかった理由と、招待無しと主張する根拠はできれば示して頂きたい。

(11) 一九九五年一〇月二三日付、ケンブリッジヤスメクラブ(極東捕虜連合)ウォレン書記からロッド・ジェイムズにあてた手紙。

(12) 小菅ら編集者が既に書籍や小文で公表したため、資料公開制限は取れたとみなす。

(13) 一九九七年八月一五日付 小菅信子よりファクス書簡。

(14) 英語校正を担当したパーヴィスは、出版直前には不自然な勢いで本の刊行が進められ校正が十分なのに出版されたと述べている。

(15) 会議の参加者について、木畑洋一は、東大出版会の「戦争の記憶と捕虜」のまえがきに駒込と根本の参加は記すが、林博史・永井均の名前は無い。

(16) サー・コータツツイは戦時中にロンドン大学

アジア・アフリカ研究所SOASで諜報集めのために日本語教育を受け、戦後は日本に対する深い知識をもとに日本大使を務め、比較文化研究の書籍を幾冊も出版している。彼のトウル序文に対する批評は、トウルの歴史解釈に実証を求める内容でやみくもな非難ではない。木畑は、日本版まえがきで、コータツツイが「日本軍の残虐性が連合軍の行動と同じ程度のもので扱われている」と評している」と書き「筋違い」だというのが、コータツツイが用いる *equivalent* という語は文脈から「同程度」ではなく、「相殺・バランスを取らせる」という意味である。コータツツイは「英国の歴史における過去の過ちが他の国・他の環境下の過ちを正当化するわけではない」との見解をとる。

(17) もしこれが事実と異なるならば誤報なのでぜひ当事者に語ってもらいたい。

(18) だが、他の場合にも誤訳は散見され、それ自体にも問題はある。小菅は『戦後和解』の一七七頁で、人民政府が、「日本軍国主義有罪、日本人民没有無罪」としたことを評価し「日本の軍国主義に罪があり、日本の人民には罪はない」と訳すが、原文の二重否定が正しいならば「日本の人民に罪がない訳ではない」つまり絶対有罪となる。日本訳が正しいなら中国語は「日本人民没有罪」である。

栗屋憲太郎監修・小菅信子訳『レリントク判事の東京裁判』(新曜社)の誤訳の批判は牛村圭「文明の裁きをこえて——対日戦犯裁判読解の試み」(中公叢書)参照。監修者の栗屋に避難の矛先が向けられ、悩んだ栗屋は本書絶版の処置をとった。